



Title	苗族史の近代（四）
Author(s)	吉開, 将人; Yoshikai, Masato
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 130, 1(右)-61(右)
Issue Date	2010-02-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42724
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARCS130_001.pdf



苗族史の近代(四)

吉
開
将
人

- 一、苗族先住説の論理——漢族西来説との相関
- 二、苗族史論の系譜——西欧東洋学から日本東洋学へ
- 三、近代中国の苗族史論——「同化」「排除」と清末民族論
- 四、「五族共和」と苗族先住説——「優勝劣敗」から「同祖」「同化」へ
- 五、西来説と土着史観——啓蒙から自律・救国へ
〔以上、前篇〕
- 六、「東北」と「西南」のあいだ——学術実践と政治力学
〔本篇〕
- 七、民族学の展開と苗族史論の解体——民族学者の歴史像
- 八、苗族エリートと苗族先住説——地域・民族主義と苗族史論
〔以下、続篇〕
- 九、国共両政権と苗族先住説——苗族史論のゆくえ
- 十、まとめ

前稿では、辛亥革命から一九三〇年前後までの中国国内における各種民族史論について検討し、近代考古学の導入によって黄河流域を中心に先史・原史文化が相次いで発見されるようになったことを背景に、中原の上古史観が外来説から土着説に基づくものへと大きく転換したことに注目し、その過程でどのように苗族先住説が形を変え、中国知識人による漢族形成についての歴史的理解にかなる影響を及ぼしたのかという点について考察した。¹⁸⁾

本稿では、中国内地の漢族世界の外縁とその外側に目を向け、一九二〇年代末から一九三〇年代にかけての時期、緊張高まる国際情勢の中で、中国知識人たちが辺境地域と辺境民族についてどのような歴史像を描き出したのかという点について明らかにしたい。注目するのは、前章で論じた考古学に遅れて、一九二〇年代末から中国に根付き始めた、民族学の動向である。それがいかにして中国において制度化され、辺境についての学術研究が展開されていったのか、そしてその中で苗族史論がどのように変遷し、内地の漢族世界と辺境の非漢族世界を取り結んだ中国民族史像がいかなる内容のものとして再構築されるに至ったのか、これを明らかにすることが本稿の目的である。

六、「東北」と「西南」のあいだ——学術実践と政治力学

(1)「東北」史論と民族史観——傅斯年

前章では、一九二〇年代における近代考古学の受容を背景として、先史時代にまでさかのぼって説き出されるようになった土着史観が漢族西來說と苗族先住説を柱としてきた従来型の先住民史観に取って代わり、黄河流域での民族および文化の土着性と自律的発展を強調する歴史像が形作られたことについて確認した。続く一九三〇年代には、そ

うした歴史像が中国内地全体に広く適用され、学术界のみならず、通史概説や教科書レベルにおいて定着を見る⁽¹⁹⁾。一方でまたこの時期、土着史観に立った民族史論は、文明形成の表舞台である中原地域や中国内地の枠を越え、中国辺境地域にも広く適応されていくようになる。国境地帯の緊張感が高まる中で、辺境民族の土着性をめぐる歴史的議論が、政治的意味を持つ時代を迎えたのである。その転換点は、一九三一年九月の満洲事変と、続いて起きた「満洲国」の建国にあった。

「満洲」の地は、民国初年以來、中国国内において、学術的には周縁として位置付けられる研究対象でしかなかった。ところが「満洲国」の建国によって国土の一角を失い、以後その地において、日本が政治経済的活動とともに、学術分野でも盛んな活動を展開したことで、中国の知識人たちは大いに刺激されたのである⁽²⁰⁾。

当時、政治の中心はすでに首都南京に移転していたが、学術の中心は旧都北平（現北京）に残されたままであった。社会経済史学者の陶希聖は、当時の様子を回想して以下のように述べる。

民国二十（一九三一年）年、孟真（傅斯年）は北平にあって、中央研究院歴史語言研究所の所長の職にあると同時、時に北京大学史学系を仕切っており、私は北京大学で教職に就いた。九・一八事件（満洲事変）が勃発すると、北平図書館が会議を開き、孟真と私はともに参加した。彼は意気盛んに発言し、「学者は何をして国に報いるか」という問題を提起した。皆で討論した結果の一つは、中国通史を編纂することだった（陶希聖「傅孟真先生」一九五〇年）⁽²¹⁾。

国土の危機に直面した知識人たちが、傅斯年の問題提起を受け、「報国」のために計画したのは、「中国通史」の共同執筆だった⁽²²⁾。そして傅斯年自身も、「満洲」という呼称を退け、中国独自の「東北」地域の通史として、『東北史綱』

の刊行計画を推進したのである。⁽¹⁵⁾ 満洲事変から一年後の一九三二年十月に刊行されたその第一冊は、傅斯年自身が執筆したものであり、そこには以下のような記述が見える。

中国が東北に問題を抱えて数十年になる。……東北の歴史研究が現在の局面にかかわるところは、経済・政治の十分の一にも及ばないことは承知しているが、私たちはみな歴史学に興味を寄せる者にすぎず、ただ能力を尽くすのみである。自分ができないとしてそれを放っておけようか。これが私たちがこれ〔『東北史綱』〕を著す第一の動機である。

日本人は近ごろ「満蒙は歴史的に支那の領土にあらず」という妄説を世に吹聴している。……東北が中国であることは、その意義はまさに太陽や月が天にあることと同じである。歴史を語ることはもともと無関係のものであるが、歴史的に論ずれば、渤海の三面はみな中土〔中国本土〕文化の発祥地で、遼東一帯は長きにわたり中国の郡県であり、……この二三千年の歴史を見ても、東北が中国であることは、江蘇や福建が中国であることと違いはないのである。

東北は華北と遠古において〔民族的にも〕同種であった。渤海・黄海を取り巻く……地域……の民族はみないわゆる「東夷」で、ツングース族はその一つである。……ツングースは、黄河流域および長江下流域の民族を構成した基本的要素の一つであるとも言われている。

近年、極東においては考古学が非常に発達し、〔仰韶文化を発見した〕アンダーソン〔J. G. Andersson〕や〔北京原人を発見した〕ブラック〔Davidson Black〕諸氏の貢献により、新石器をまじえた〔金石併用〕時代に、東北地域が人種および文化的にすでに華北と一体であったことを、私たちはすでに知っている。……東北の考古学

でこのような結論を得たのは、両氏だけではない。日本の学者が証拠とするものでも、異説を立てることができないのである。日本の東京(京都)帝国大学の濱田耕作教授は一九二八(二七)年に旅順の貔子窩を発掘し、……付篇の人骨研究は、京都帝国大学の清野謙次教授によるもので、結論として「まとめると、貔子窩人は多くの点で、現代支那人および朝鮮人と比較的遠く、石器時代の仰韶村人および沙鍋屯人と近い。もし貔子窩人と現代の人種との形質的関係を考えるなら、非常に多くの骨格の形質において、貔子窩人は現代の人種の中では、支那人とのみ最も近いと言える。そうであれば、この石器時代の貔子窩人は、現代支那人の祖先であると言うのが、最も通じる説である」とされている。……ツングース人が華北から東北に移り住んだ民族であり、そのために中国人はそれと共通する基本を持つのであるという説は、シロゴロフ(S. M. Shirokogoroff)などの諸氏が述べるところであるが、推測にかかわる点もあるので、詳述しない(傅斯年『東北史綱』一九三二年)。

すなわち傅斯年は、強い救国意識の下で、考古学の成果によって、中原と渤海沿海地域が先史時代以来、歴史的関係を保ち続けてきたことを主張し、「満洲」の地を中国内地と歴史的に切り離そうとする日本の「満洲」史観を批判する。議論の中で援用されたのは、当の日本による遼東での発掘成果であり、また前稿で見たようにこの二年後には傅斯年が『城子崖』序文⁽¹⁶⁾で厳しい批判を加えることになる、アンダーソン(J. G. Andersson)による仰韶遺跡での発掘成果であった。

この『東北史綱』中文版に先立っては、まず英訳本が刊行され、国連によって一九三二年三月に現地に派遣されたリットン調査団にも、「満洲国」の存立を認めない中華民国側の主張を裏付ける資料として提供されたという⁽¹⁷⁾。

『東北史綱』の中で傅斯年が批判の矛先を向けたのは、日本の清朝史家の矢野仁一によって提出された「満洲」は「支

那」固有の領土ではない、という学説であつた。⁽¹⁰⁾ その批判に答えるかたちで執筆されたのが、矢野仁一『滿洲国歴史』である。矢野はその中で、傅斯年らの議論に対して反駁を加え、自説の正当性を主張した。注目されるのは、矢野がそこで中原の民族史について述べた以下の内容である。

古代南滿洲において支那人の居住していたことは、これは疑うことができないといたしましても、支那人のみで、(ツングース系の)滿洲蒙古系の人民が居住していなかったという証拠がない以上、南滿洲が支那人の土地であつたということはできません。……古代において、文献的証拠を残し得るような人民は、支那人以外にあると考えることができませんか。古代支那において黄河流域に苗族が居住していたということも、支那人の残した文献によって我々はこれを認知したのであります(矢野『滿洲国歴史』一九三三年)。⁽¹¹⁾

ここで矢野は、傅斯年の依拠した遼東での考古学的データの妥当性を認めつつも、文献に非漢族の「滿洲蒙古系の人民」が「南滿洲」に存在した記述が見られないことは、彼らがその地に居住していなかった証拠とはならないとして、傅斯年の主張に対し、苦し紛れの反駁を加えている。そこで引き合いに出されているのは、中原での「苗族」と「支那人」(漢族)との関係であり、そこには典型的な苗族先住説とそれにもとづく先住民史観が容易に見て取れる。すなわち、矢野仁一は「滿洲」における「滿洲蒙古系の人民」と「支那人」との関係を、黄河流域の中原における「苗族」と「支那人」との歴史的關係に重ね、先住者である前者を外來者である後者が圧倒していく過程として、歴史像を描いていたと考えられるのである。

以上からすれば、当時、日中両国の歴史学界の間で対立点として現れた「滿洲」史論争とは、「滿洲」の地の先住民族をどのような民族系統として歴史的に評価するかという、二つの異なる民族史観をめぐって起きた民族史論争に他

ならなかったと言えるのである。矢野はそれを今日の漢族とは別系統の先住民族であったとし、「満洲国」建国の正当性を含意させた。これに対して傅斯年は、それを今日の漢族と関係性の強い「東夷」の一部として、漢族とそれが「同祖」の土着民族であることを主張したのである。⁽¹¹⁾

(2) 啓蒙から救国へ——顧頡剛

以上、傅斯年を中心に、満洲事変以後の中国知識人が抱いた救国意識と、辺境に対する学術実践との関係について論じた。矢野と傅斯年の論争が行なわれていた頃、北平では歴史学者の顧頡剛によっても、独自の学術実践が展開されようとしていた。顧頡剛が主宰した禹貢学会による辺境歴史地理研究である。一九三四年に刊行された会誌『禹貢半月刊』創刊号には、以下のような記述が見える。

この数十年の間、我々は帝国主義者の圧迫をいやというほど受け、そのため民族意識は激しく盛り上がり、非常に高まっている。こうした意識の下で、中国通史を手にし、自民族の構成が一体いかなるもので、結局どの地域が自分たちに帰属すべきであるのかについて読んでみたいと、皆が望んでいる。ところがこの仕事の難しさは、実際のところ一般の人の想像を超えるものである。民族と地理は不可分な二つのことからであり、我々の地理学が発達していない以上、民族史の研究はどうして根拠を得ることができようか（顧頡剛・譚其驥「発刊詞」一九三四年）。

このように顧頡剛は、同会の目指す辺境歴史地理の研究を、最終的な課題である「民族史」（中国通史）編纂のための前提条件と位置付けていた。その思いは、前述の傅斯年の「報国」意識とも共通するものと言える。彼らによる研

究とは、単純な学術性だけを意図したのではなく、何よりも日本の中国への野心に対する救国意識によって支えられたものであったのである。⁽¹⁵⁾その点は、顧頡剛により、一九三六年に政府関係者に対し、政策提言として提出された、以下の一文に、より明白に見て取ることができる。

私たちが立ち上げた禹貢学会は、初めはただ学校での講義を拡大したものを主題として研究し、民族地理の資料を探し集め、分業で協力し、将来の系統だった著作に備えていただけであった。しかし強力な隣国〔日本〕が残虐をほしのままにして、亡国の日が迫ると、期せずしてともに民族主義の旗の下に結集し、また敵が我が土地を蚕食し、国境がその圧迫を受けると、こぞって辺境歴史地理の研究に向かい、満洲・蒙古・回・チベットについて、いずれも研究者を得たのである。……本会の地理沿革史および民族史研究の計画……の有用性については、事が国家の大計にかかわり、目前で強敵が虎視眈々としており、後方で奸人が密かに伺っていて、公開するのは適当でないので、内々に述べる次第である（顧頡剛「禹貢学会研究边疆計畫書」一九三六年⁽¹⁶⁾）。

同文で顧頡剛は、これに続けて、清代道光年間以後の辺境の危機に際し、経世致用の学として発展を見せた清末の辺境研究について回顧する。彼は、列強の侵略を受けた清末の状況に現在を重ね、かつての辺境研究の反省の上に立ち、それに続く二度目の救国運動として自らの活動を位置付けていたのである。

(3) 満洲事変前夜——一九二〇年代末広州と中央研究院歴史語言研究所の創設

以上、一九三〇年代前半の北平で学術界を主導する立場にあった傅斯年と顧頡剛が、一九三一年の満洲事変以後、いかにして救国意識を高揚させ、その中で辺境に対していかなる歴史学的実践を試みていったのかという点について

述べた。

二人が、これに先立つ時期、中原地域を中心とする上古史研究に専ら関心を向けていたことについては、すでに前章で確認したとおりである。では、ここに至るまでの間、彼らどのような辺境認識を持っていたのだろうか。それは、上で見た満洲事変以後の辺境認識と、いかなる関係を持つものとして理解されるのだろうか。

この問題について考えるためには、一九二〇年代末の広州に目を向け、当時の複雑な学術動向について整理しなければならぬ。

辛亥革命を経て中華民国が建国されると、当初は、北京政府の首都で文化的中心地であった北京を核として学術が展開した。しかし一九二六年頃から、北京の軍閥政府による政治的弾圧や経済不安を避け、多くの知識人たちが次々と南下するようになった。こうしてこの時期、新たに政治・学術の中核となったのは、北京政府に対抗する国民政府の首都、広東広州であった。中華民国の学術は、この時期、南方の広州で再編されたのである。

顧頡剛も、一九二六年から二七年にかけて広州へと南下した。傅斯年もまた、欧州留学からの帰国先として、北京ではなく広州を選び、一九二六年十二月、広州の中山大学に文学学院院长として着任した。この時期、彼らが広州など南方で展開した種々の学術活動は、その地に各種の学術団体・機関を組織・設立する機運を生み出した。折りしも、世界における学術研究は、個人研究もしくは同学の士のサロンの研究から、研究者のエリート集団による組織的研究へと軸足を移しつつあった。欧米留学経験を持つ新しいタイプの知識人たちが帰国し、集権的国家体制を目指す南京国民政府が誕生する中で、広州など南方での試みは、中華民国の学術を発展させる新たな礎となっていくのである。⁽¹⁷⁾南方辺境の重要性が学術界で意識されることは、軍閥統治下の北京でもなかったわけではない。⁽¹⁸⁾しかし、顧頡剛や

傅斯年に代表する知識人たちの活動が、新たに南方の厦門や広州を拠点に展開されたことは、以下に述べるように、南方辺境の重要性が中国学術界に広く認知される上で、大きな転機となったのである。

顧頡剛は、前章で見たように上古史の新たな研究に専心した一九二〇年代の半ばまでの時期、中国初の近代的人文総合研究組織である北京大学研究所国学門の助教として、北京にあった。しかし一九二六年八月には北京を離れ、福建の厦門大学へと移る。同年十月、厦門大学には、北京大学研究所国学門に做った付置研究所として、国学研究院が成立するが、顧頡剛は厦門大学で魯迅との紛糾に巻き込まれてしまう。そこで彼は、北京大学時代からの旧知である傅斯年の誘いを受け、一九二七年十月に厦門大学から広東広州の第一中山大学（後の中山大学）へと移り、傅斯年を主任とする中山大学語言歴史学研究所の創設に参加することになったのである。

この時期、中国の政局は、風雲急を告げていた。広州を出発し軍閥打倒を目指した国民革命軍による北伐は快進撃を果たし、一九二七年四月、南京に新たに国民政府が樹立される。同月、国民政府は、国民党の元老である蔡元培らの意向を受け、中華民国大学院（文部省）と国立アカデミーである中央研究院の創設を決定する。

中央研究院は一九二七年十一月、大学院院長（文部大臣）蔡元培を研究院院長兼任とし、中国初の国立アカデミーとして成立を見る。そしてその翌一九二八年三月、中華民国大学院は、中央研究院に歴史語言研究所を設置することと決定し、広州の傅斯年と顧頡剛をその常務籌備（準備）員に任命して、設立準備に着手させたのである。二人はかつて校長蔡元培のもとで北京大学に学び、その薫陶に浴していた。南方で二人が立ち上げた中山大学語言歴史学研究所の実績が評価されて、その成果が中央アカデミズムへと合流することが期待されたのである。

中央研究院自体も、成立間もない一九二八年四月には、研究院そのものの総合的科学研究プロジェクトとして「広

西科学調査団」の派遣を計画し、南方辺境に位置する廣西内陸部を中心に、動植物標本の採集と、地質および「風俗〔民俗〕人種〔民族〕」に関する調査を実際に行なっている。「〔南京国民政府管轄下の〕各省のなかで秩序が最も優れ〔安定しており〕科学〔研究の〕資料が最も豊かと称される廣西」に、「気象」「地質」「動植物」「農林」「人類及考古」「風俗〔民俗〕」の各分野の研究者を派遣することが、本プロジェクトの前身であった。¹⁶⁾ 中央研究院が、成立当初から、未開拓の學術フロンティアとして南方辺境地域に関心を向け、国家事業として學術研究を推進する強い意志をもっていたことがうかがえる。

傅斯年と顧頡剛はまさにその南方の地にいたのである。一九二八年五月、中央研究院歴史語言研究所設立の準備段階にあつた当時、傅斯年は「歴史語言研究所工作之旨趣」という一文を執筆する。その中で彼は、研究所が目指すべき研究分野として、「文籍考訂」「〔歴史〕史料徵集」「考古」「人類及民物」「比較芸術」「漢語」「西南語」「中央亞細亞語」「語言学」を挙げ、それぞれの趣旨を説明した。そしてまた、広州を拠点とした地域色ある研究分野として、言語学では漢語各方言、人類学では漢族および漢族以外の「小民族」の調査研究を挙げ、その趣旨について以下のように述べた。¹⁷⁾

私たちが設置しようとしている〔中央研究院歴史語言〕研究所は、その半分を広州に所在させる予定である。

広州の周辺は言語学と人類学の材料に最も富んでいる。……広東省内および隣接の省には非常に多くの種類の方言があり、……人類学の材料としては、漢族以外にさらにいくつかの小民族がいて、漢族内部にもいくつかなる区分や暮らしがあり、これらの最も貴重な材料はおそらく徐々に開化と〔外界との〕交流によって消滅するものであり、急いで収集に着手したいと考える。……私たちは読書をする人ではない。ただ天の果てから地の底

まで、手足を動かして資料を探すのみである（傅斯年「歴史語言研究所工作之旨趣」一九二八年五月）。

文中に見える「小民族」とは、広州の立地を前提として言うのだから、西南辺境民族を意味することは疑いない。こうして、新設の中央研究院歴史語言研究所では、歴史と言語を二つの柱としつつ、西南辺境民族を研究対象に含む学術体制が形作られるに至った。以下で述べるように、西南辺境民族に対する研究は、その後の民国学術史の中で主要な位置を占めるようになる。そのことは、中央研究院歴史語言研究所の創設の地が、南方の広州であったという歴史的条件を抜きには理解できないのである。

(4) 中山大学語言歴史学研究所と西南辺境民族研究

中央研究院歴史語言研究所の成立の際に、西南辺境民族が主要な研究分野として位置付けられた経緯は、以上述べたとおりである。しかしその背景を考える上で、上記の地理的条件に加え、同時期の広州に存在したもう一つの研究機関の存在を無視することができない。すなわち、一九二七年十一月に主任傅斯年を中心に、着任間もない顧頡剛も参加して設立準備が始められ、一九二八年一月に正式な成立を見た、中山大學の付置研究所、中山大學語言歴史学研究所である。そもそも、一九二八年三月に中華民国大学院が中央研究院歴史語言研究所の設置を決めた時点では、広州ですでに活動を始めていた中山大學語言歴史学研究所を、大学院が接収する構想もあつたと見られる⁽¹⁰⁾。では、それは一体どのような研究所だったのだろうか。

中山大學語言歴史学研究所は、創設に先立つ一九二七年八月、「廣東及隣省之民俗及人類学材料徵集（創設人類学館）」を共同研究プロジェクトの一つとすることを発表しており、後に成立を見る中央研究院歴史語言研究所と同様に、言

語学と歴史学に加え、人類学を当初から研究領域の一つとしていたことが明らかである。中山大学語言歴史学研究所は、実際にその分野について、以下のような各種実績も上げている。

一九二七年十一月・広西の「猺山」に向かった中山大学生物学系教授の辛樹幟らと連携しながら「猺人」（現瑶族）

風俗について情報収集⁽⁸⁾

一九二八年 二月・「獯狼苗猺黎蛋等民族研究」の特別号を計画し、諸民族の写真や論文の投稿を募集⁽⁸⁾

一九二八年 七月・「西南民族研究」特集号刊行⁽⁸⁾

シロコゴロフ (S. M. Shirokogoroff) と楊成志らを雲南に派遣して「獯羅」（現彝族）調査⁽⁸⁾

一九二八年 九月・「猺山調査」特集号刊行、辛樹幟らが行なった「猺山」での調査と民族資料の収集成果などを

紹介⁽⁸⁾

このように、設立当初は「広東及隣省之民俗及人類学」と漠然と示されていたにすぎなかった研究領域が、わずか一年以内の間に「猺人」「苗」「獯羅」などの具体的な諸民族へと広がり、⁽⁸⁾ 広西から雲南にまたがる広大な地域の「西南民族」を対象とするまでになった様子が見て取れる。

この時期の中山大学語言歴史学研究所を取り仕切っていたのは、主任の傅斯年であり、中央研究院歴史語言研究所の所長を兼任して留守がちな傅斯年を、補う役割を果たしていたのは顧頡剛であった。彼ら二人による設立準備段階を経て、同じ広州で一九二八年十月に成立した中央研究院歴史語言研究所において、西南边境民族の研究が主要領域の一つとして位置付けられた背景には、中山大学語言歴史学研究所でのこうした実績が前提としてあったのである。

さらに、南方の民族研究という点では、中山大学赴任前に顧頡剛が籍を置いていた厦門大学国学研究院が、一九二

七年に民俗学の資料収集を計画した際、その項目の一つとして、伝説・民間歌謡と並び、「苗民（或散居各地之盤・雷・藍等姓）之生活状況」を含んでいたことも注目し値する。¹⁸⁾

一九二〇年代末広州における西南辺境民族への学術的関心は、厦門大学、中山大学、中央研究院へと連なる学術史的展開の中で、新たな学術体制の構築を目指す傅斯年と顧頡剛らの活動を背景に、一連の系譜として発展を遂げたものであったことが理解されよう。

(5) 一九二〇年代末広州における西南辺境民族への眼差し

西南辺境民族は、以上のような歴史的経緯で、広州の二つの研究所において、研究対象として位置付けられたことがわかる。ではこの当時、傅斯年や顧頡剛は、西南辺境民族そのものに対し、どのような関心を向けていたのだろうか。

前述した中山大学語言歴史学研究所が一九二八年七月に刊行した「西南民族研究」特集号で、その特集号が生まれるに至った経緯について、当時、研究所で出版物の編集を担当していた民俗学者の鍾敬文が、以下のように述べている。

およそ二三ヶ月前のある日、私と紹孟〔余永梁〕は編集室で雑談をしていて、どうしたわけか、わが国西南部の漢人以外の各民族の問題に及び、そこで私たちは〔研究所の学術誌である〕『語言歴史学〔研究所〕週刊』で特集号を出すことを決定したのである（鍾敬文「獯民略考」一九二八年五月）¹⁹⁾。

彼らがそれを企画したきっかけは、日常の偶然的産物に過ぎなかったとする。では、広州に暮らす彼らにとって、

当時、西南中国の非漢族はどのような存在だったのか。それについて考える上で、この当時彼らの周辺で起きた一つの出来事が注目に値する。同じ特集号に収録された一文の中で、研究所の関係者であった陳錫襄が、以下のような興味深いエピソードを紹介している。

〔広東内陸部の〕連県の獠民〔現瑶族〕が広州に来たのは、……何かの会議に参加するためだったという。〔三月二七日の中山大学語言歴史学〕研究所の〔第一次〕会議では、もともと彼らに舞踊を見せに来るように依頼することを議決していたが、その後なぜか実現しなかった。四月五日六日の二晩に、東山孤児院が、募金を集めるために彼らに舞踊を見せに来るように依頼した……が、六日の晩に行ってみると、二時間余り待っても獠民の芸術家たちは現れなかった。……翌日の午後、……バスに乗ると……静聞〔鍾敬文〕たちが座っているのを見かけ、……彼らが言うには、獠民を訪ねに行くところであるとのこと、……一行には、紹孟〔余永梁〕・静聞のほかに、楊成志と劉万章の二人がいた。……獠民の〔広州滞在中の〕住居は、……私たちが入っていくと、……非常に多くの〔実際はわずか数人だが、初めてのことで、特に多めに感じたのである〕いわゆる獠民が見え……た。……彼らの容貌は、二三人が北米のインディアンに酷似していたほかは、みな漢人と違いがなかった。……彼らの中には銀の耳輪をつけている者がいて、多くの者たちは手に刻みタバコの〔葉を入れる〕袋を持っていた。誰だか忘れたが、同行者の一人が「ほら彼らもタバコを吸うんだよ」と、まるで新大陸でも発見したかのように得意になって言った〔陳錫襄「獠民訪問記」一九二八年五月〕。

広州で暮らす彼らにとって、同じ広東省内とはいえ、内陸部に暮らす「獠民」に接するのは初めての経験だったのである。新鮮な出来事として好奇心を抑えられなかった様子が伝わってくる。「獠民」との出会いが、鍾敬文や余永

梁らに、特集号の出版に向けて影響を与えたことは、想像に難くないところである。

顧頡剛についても、連泉の「獠民」が広州に滞在したこの時、四月五日には傅斯年と連れ立って培正学校に出向いて彼らの舞踊を参観し、七日には傅斯年やシロコゴロフ (S. M. Shirokogoroff) と彼らの住居に聞き取り調査に出向くなど、強い関心を向けた様子がうかがえる。管見の限り、顧頡剛が南方滞在時に民族地域を直接訪ねたことはなかったようだが、広州でのこうした経験は、上古史研究に没頭していた頃の北京での生活では得られるはずもないものであり、新天地で暮らす顧頡剛に鮮烈な印象を残したに違いない。

(6) 傅斯年・顧頡剛に見る西南边境民族観と学術意識

一方で、当時の傅斯年・顧頡剛らの西南边境民族への関心が、今日的な人類学民族学の範疇ではとらえきれない性質を備えていることも、見逃せない点である。

先に紹介した「歴史語言研究所工作之旨趣」と同時掲載の、一九二八年五月に傅斯年が提議したものとされる文書に、以下のような記述が見える。

西南各民族の問題は、事实上、中国史においてそれ以上に重要なものがない問題であり、(問題とすべきものは)もとより言語に限らないが、西南民族の言語の研究は、彼らについて認識する第一歩である。ましてやこれらの言語は、チベット・ビルマ・シヤム(タイ)および雲南・貴州・広西・四川などの地の非漢族、すなわちインド・シナ語系のチベット・ビルマ支、あるいは漢・シヤム支に属するもので、漢語の同族であり、漢語の研究、特に古代漢語の研究は、これらの言語との比較に大いに頼る。もちろん現在のインド・シナ語系の比較言語学はまだ

未成熟である。インド・ゲルマン語〔印欧語〕系の比較言語学の発展は、二つのすでに発達を見た古典語学、すなわちインドで早くから発達した梵語学、および着手しやすい北欧・中欧の方言〔学〕などに頼っているが、インド・シナ語系の研究には、現在まったくそのような頼みとするものがないのである。……しかし、これらの言語〔西南民族の言語〕は、歴史的、地理的、政治的に、みな中国と少なからずの関係があり、……文法と文字には〔歴史的に〕今日まで一定の連続性を見出せる。……今日インド・シナ語系が頼みとするものは、インド・ゲルマン語系〔の研究〕が十九世紀初めに始まった時に頼みとしたものに遠く及ばないが、まったくどうしようもないわけではない。もしこれらの言語〔西南民族の言語〕の研究が成功すれば、ただインド・シナ語系の知識が進歩するだけでなく、漢語の研究にも大いに助けとなるだろう。私たち中国人は自分の母語〔漢語〕がこの一族〔言語系統〕インド・シナ語系〕の中にあるのだから、天性的、あるいは心理的に、これらの言語〔西南民族の言語〕を理解する能力は欧州人よりも高い。もしインド・シナ語系の一連の学問がまた欧州人に先を越されたならば、実に中国人のこの上ない恥である（傅斯年「本所〔中央研究院歴史語言研究所〕對於語言学工作之範圍及旨趣」一九二八年⁽¹⁰⁾）。

傅斯年はこのように、「西南民族の言語を中央研究院歴史語言研究所の研究分野とする意義を、印欧語研究にとつてのサンスクリット語・北歐中欧方言研究を引き合いに出して論じている。その前提にあるのは、『漢語』（中国語）を、西南辺境民族の大多数の言語と同じ「インド・シナ語系〔印度支那語系〕」に位置付けるといふ、当時の言語学的解釈である。これを理解した上で上の文章を読むと、傅斯年が、印欧語〔インド・ゲルマン語系〔印度日耳曼語系〕〕でのゲルマン語（欧州諸語）とインドの言語との関係を、「インド・シナ語系」での漢語と西南民族の言語との関係に

なぞらえ、前者でのサンスクリット語研究・欧州方言研究を、後者の西南辺境民族の諸言語研究に対比させていることが読み取れる。

傅斯年の欧州留学体験は、清末民国初年の章炳麟に代表される単純な学術ナショナリズムとは異なる、学術的有利さを冷静に判断する国際的視点を生み出した。そしてまた同時に、留学中に最も長く滞在したドイツで全盛期を迎えていたアーリアン学説と印欧語研究⁽⁸⁾は、彼に母国中国での学術発展のための着想を与えたのである。上文に垣間見える傅斯年の西南辺境民族に対する眼差しは、近代欧州人のインドに対するそれと重なるものだったのである。

このように、傅斯年の西南辺境民族の言語に対する学術的関心は、あくまでも中国内地の学術課題、すなわち漢語研究に還元されるもので、辺境民族本位の関心は認められない。こうした傅斯年の西南辺境民族に対する眼差しは、素朴で古風なものであるほど僻地に残存するという、ある種の「周圏論」的発想法として理解すべきものであろう。傅斯年が西南辺境民族に期待したのは、今日まで系譜として連なる「生きた化石」のような役割であり、それがミツシング・リンクとなって中心地域の学術的課題が解決されることだったのである。

一方の顧頡剛の場合も、先に挙げた厦門大学の例で、「苗民」の研究が当初はあくまでも民俗学の一環としてされていたように、当初は西南辺境民族に関する課題も、彼が北京時代から熱心に進めていた伝説・民間歌謡の収集と並立されるものに過ぎなかった。形成期にあったこの時期の民俗学研究が、顧頡剛を中心に推進されていく状況があり、そこに民族学に通じる要素が含まれていたことは、すでに多くの論者が注目するところである⁽⁹⁾。その中で非漢族への関心は、漢族民間文化の延長上に、その周縁的存在として位置付けられたものに過ぎなかったのである。

また当時において、西南辺境民族への関心は、前章で論じた一九二〇年代の上古史的関心とも連結されるものであっ

た。一九二八年三月に開かれた、中山大学語言歴史学研究所の第一次會議では、「瑤民」（現瑤族）の研究に関連して、「苗人」と海南島の「黎人」に対する研究を進めることも提議されているが、この提議を行なったのは上古史研究者の丁山であったという⁽¹⁶⁾。同研究所による西南辺境民族研究の出発点には、単なる人類学民族学的好奇心ではない、上古史的関心に連なるものが存在した可能性がある。中山大学語言歴史学研究所と中央研究院歴史語言研究所において具体化し、構想された研究計画の中に、西南辺境民族が位置付けを得たこと、そしてそこに上古史研究者であった顧頡剛が関与したということは、この当時の民俗学・民族学・上古史研究が未分化な學術状況を前提にしてはじめて理解されるものだろう。

しかしまた、顧頡剛にとつては、広州での経験が西南辺境民族に対する理解を深化させる契機となり、しばらく後にはその分野の研究の意義を、強い使命感とともに認識する状況が生まれていたことが、以下の記述からうかがわれる。

私たちの中山大学は広州に設置されており、西南諸省の民族研究に対して逃れられない責任をもっている。……今春、「西南民族研究」特集号を出版し、今また「广西瑤山調査」特集号を出版したのは、大衆にこのテーマを掲げて、彼らにこの方面へ目を向けさせ、天地の間に「西南民族」なるものがあることを知らしめ、学問として「西南民族研究」というものがあることを知らしめんがためである。……前回の「西南民族研究」特集号は、辛（樹幟）先生たちの実地調査を除くと、大半は地方志から抜き出した資料であった。かつて地方志を纂修した人の眼光は、彼らが調査記録した方法ともどもきわめて幼稚であり、それゆえにこれらの資料は価値があまり高くなく、これらの資料を援用して書かれた論文は、当然多くの欠点を持つ。……知識が欠乏し、研究などというものは思

いもよらず、また世の中に学問という言葉があったことさえ忘れた中国に、いま突然、子供のような（無邪気で幼稚な）私たちが飛び出してきて「西南民族を研究しよう」と叫べば、身のほど知らずかもしれないが、学問に心ある人が聞けば、ついには谷底に足音が響いて、少しずつこの沈滞した空気を打ち破り、将来の成功を望むようになるに違いない。……私たちが自らを励ます言葉は、ただ「進め進め進め、谷底から上へとはい上がり、さらに山頂へと登りつめよ」のみである。私たちは進歩しないことだけを恐れ、幼稚であることを恐れない。幼稚であることは、生まれて成長する中で必ず通過する一つの段階なのだから（顧頡剛「（猿山調査専号）跋語」一九二八年十一月）。

彼は、中山大学語言歴史学研究所がこれに先立って刊行した「西南民族研究」特集号の内容に「失望」したという地質学者の丁文江の辛辣な感想を受け、新たに編集した「猿山調査」特集号の巻末に、以上のようなコメントを寄せたのである。顧頡剛の「進め進め進め、谷底から上へとはい上がり、さらに山頂へと登りつめよ」という主張に読み取れるのは、その半年前に発表された中央研究院歴史語言研究所の「歴史語言研究所工作之旨趣」に示された「私たちは読書をする人ではない。ただ天の果てから地の底まで、手足を動かして資料を探すのみ」という主張（前）と対応する意識である。伝統的読書人ではなく近代科学の研究者として、書齋を飛び出してフィールドで資料を収集することによって、新たな学術伝統を打ち立てることを鼓舞するその主張には、傅斯年とともに中央研究院歴史語言研究所の創設した際の思いと同じく、顧頡剛の西南辺境民族研究に対する強い使命感が込められていると見るべきだろう。

(7) 一九二〇年代末広州の学術実践が残したもの——断絶と継承

以上では、先に見た「満洲」の衝撃後の救国意識と学術実践に先立つ時期の、傅斯年・顧頡剛の動向と、民国学史の展開をあわせて整理し、彼らの辺境認識のあり方について考察を試みた。そこに見て取ったのは、異なる問題意識に支えられつつも、共通して現れた学術的使命感であった。しかしそこにはまだ、後の「東北」に対するもののように、強い緊張感や救国意識は認められない。辺境民族に対する学術研究の意義についても、その認識には時間的な隔たり以上の落差がある。彼らの学術実践が、使命感に支えられたものから救国意識に支えられたものへと転回するのは、「西南」から「東北」への自然な発展ではなく、「満洲」の衝撃の大きさ抜きには考えられないものであることが、以上によって明らかとなる。

中央研究院歴史語言研究所が一九二八年十月に広州で正式に成立すると、傅斯年はその所長に専任となり、兼務し続けてきた中山大学語言歴史学研究所の主任の職を辞す^⑧。そして一九二九年六月には中央研究院歴史語言研究所自体も、創設の地である広州から北平（現北京）へと移転を果たすのである^⑨。傅斯年の後を承け、中山大学語言歴史学研究所の主任となったのは顧頡剛であった。傅斯年に翻弄されたかたちで、創設から一年でしかない研究所を運営するという重責を担うことになった顧頡剛だが、一九二九年二月には中山大学の職務を投げ出し、彼もまた広州を離れて北平へと去った^⑩。彼らは、自らが立ち上げた中山大学語言歴史学研究所のその後の成果を目にすることなく、はるか彼方の北平で、殷墟発掘のために奔走し^⑪、あるいは上古史研究に没頭する日々を舞い戻っていたのである。

このように見ると、一九二〇年代末広州における西南辺境民族に対する学術実践は、傅斯年・顧頡剛においては、以後の展開へと連接されることのない一齣のエピソードに終った感が否めない。しかしそれは、彼ら二人以外のとこ

ろで、その後の西南辺境民族をめぐる学術史に影響を残すことになった。彼らが雲南に派遣したシロコゴロフ(S. M. Shirokogoroff)と楊成志を通じ、その後の中国学術界では、以下に述べるような二つの異なる展開が、それぞれ伏流となって現れてくるのである。

七、民族学の展開と苗族史論の解体——民族学者の歴史像

(1) 中央アカデミズムへの伏流——中央研究院の西南辺境民族研究

伏流の一つは中央アカデミズムへと合流を果した。前章での整理によって明らかになったように、一九二〇年代末の広州を舞台とした諸研究は、あくまでも中央アカデミズムの中に位置付けられる性質を持っていた。中山大学語言歴史学研究所は、国民政府の首都としての広州の最高学府において、旧来の学術伝統に代わるべき存在として、無から設立準備が進められたものであった。広州においてそれと同時期に双子のような関係で成立した中央研究院歴史語言研究所が、中央アカデミズムの新たな担い手であったことは言うまでもない。広州でそれら二つの組織を中心に構想された西南辺境民族研究は、まず中央アカデミズムの展開の中に位置付けて評価されるべきである。

当時の広州で、西南辺境民族研究を指導する立場にあったのは、人類学者のシロコゴロフ(S. M. Shirokogoroff)史禄国)であった。亡命ロシア人である彼は、長らく王立アジア協会上海支部など中国在留の欧米人学術界を中心に活動していたと見られるが、一九二八年四月に、中山大学語言歴史学研究所の招聘により、人類学教授として広州に着任し、同年七月には楊成志を助手として帯同して雲南へ羅羅(現彝族)調査に向かった⁽²⁾。シロコゴロフは、また同時

に傅斯年によつて、中央研究院歴史語言研究所の人類学分野を主導することを期待されていた。傅斯年の執筆と見られる当時の報告には、「本〔歴史語言研究〕所は中山大学と協同でシロコゴロフ教授を派遣して雲南に赴かせ、彼の地の人類学調査のおおよその状況を調査させ、それによつて、将来訓練を積んだ助理員を派遣して、現地で長期的に調査させる便とする」とある。⁽²⁰⁾これによつて、この調査の意図が、中央研究院と中山大学が共同でシロコゴロフを派遣すること、将来中国が独力で進めるべき調査に資するという点にあったのは、明らかである。

その前提には、中国国内に近代学術としての西欧式の人類学民族学を習得した人材がおらず、外国人に頼らざるを得ないという現実があつた。⁽²¹⁾すでに述べたように、一九二〇年代末の中国国内には、民俗学からの延長発展というかたちをとつて、顧頡剛らを中心に辺境民族への関心と各種実践が試みられていた。しかしそれがそのまま中央研究院歴史語言研究所における西南辺境民族研究の基礎に発展しうるとは、傅斯年は評価していなかつたのである。⁽²²⁾

ところが、シロコゴロフは、現地社会情勢の不安を理由に、短期間、雲南省都の昆明に滞在しただけで、民族調査の成果を上げることなく広州に引き返してしまつた。そのことが、彼に同行していた楊成志など中山大学の中国人研究者たちの強い反発を呼び起こすことになる。⁽²³⁾その結果、シロコゴロフは中山大学との契約を打ち切られ、また同時に彼を通じて近代西欧の人類学民族学を吸収し、歴史語言研究所の主要な分野の一つと位置付けることを構想していた傅斯年の期待も裏切られる結果となつた。⁽²⁴⁾以後、中央研究院における人類学民族学研究は、形質人類学と考古学が歴史語言研究所の李濟らに委任されたほかは、基本的にすべて蔡元培主導による中央研究院社会科学研究所の民族学組（部門）が担うことになるのである。

中央研究院社会科学研究所は、一九二七年十一月の中央研究院成立に際し、歴史語言研究所に先んじて、設置が決

定された所屬機関の一つである。一九二八年には同研究所内に民族学組が設けられ、民国初年以來、民族学に関心を寄せ続けてきた院長蔡元培が、自らその主任を務めることになった。⁽²⁰⁾先に述べたように、中央研究院は、成立間もない一九二八年四月から「広西科学調査団」を広西内陸部に派遣する計画を立て、各種調査を行なっている。社会科学研究所が同年七月から八月にかけて広西の凌雲県周辺で行なった「猿人」の民族調査もまた、それと連動したものであった。⁽²¹⁾

この間に中国の政治状況は一変する。北伐の成功により、一九二八年六月、北京に青天白日旗が翻り、同年十二月、東北の張学良が「易幟」したことによって、東北地域までを含む国土の統一が、南京国民政府の下に実現したのである。中央研究院による学術のフィールドも、広州国民政府の地元であった広東・広西から、新天地となった東北の地や、南方でも広東・広西よりも内陸の地域へと、新たな広がりを見せることになった。

一九三〇年、社会科学研究所は民族学組の凌純声と商承祖を黒龍江省北辺に派遣して、赫哲族（ホジェン族）調査を実現し、歴史語言研究所も考古学組の梁思永を黒龍江省や熱河省（現河北省北部）に派遣して、それまで烏居龍蔵やアンダーソン（J. G. Andersson）など外国人研究者らによって独占されてきた、中国東北地域の遺跡調査を実現している。同時期に自然科学分野において、広西に続き、四川・貴州で組織的な調査活動が行なわれていることも、同様な歴史的文脈の中で評価されよう。そして実は、上述の中央研究院と中山大学の共同派遣によるシロコゴロフ・楊成志の民族調査も、一九二八年六月の計画段階では対象が広西の「猿人」であったものが、翌月の出発までの間に雲南を対象とすようになったことが確認される。この場合も、おそらく「広西科学調査団」の一環として当初計画されていたものが、中国国内情勢の変化を受けて転換したことが推測されよう。

中央研究院社会科学研究所が、広西のさらに内陸に位置する湖南西部で行なった苗族調査も、当時の歴史的文脈の中で評価できよう。同研究所は一九二八年六月の段階で、すでに「西南各省苗瑤調査」を計画していたと見られる。⁽²¹⁾ところが優先されたのは東北での赫哲族調査であった。そして東北を失った後の一九三三年五月、赫哲族調査に続くかたちで、凌純声・芮逸夫が派遣されて、湖南での苗族調査が開かれたのである。

翌一九三四年四月、彼ら二人が所属した社会科学研究所の民族学組は、中央研究院の組織見直しのために、社会学研究所から切り離されて歴史語言研究所に編入され、歴史語言研究所の第四組（人類学組）となる。⁽²²⁾これに伴い、凌純声と芮逸夫は、苗族調査の成果を携えて、歴史語言研究所へと合流したのである。その後、彼らが加入したことで、歴史語言研究所では、改めて西南辺境民族の研究が主要な研究領域の一つとなった。

こうした帰結が、実は上で見たシロコゴロフの一件の延長線にあることが、以上の整理によって明らかになろう。逆説的ではあるが、シロコゴロフが広州で歴史語言研究所による西南辺境民族研究の中核とならなかったことが、社会科学研究所との合流を条件付け、凌純声と芮逸夫が苗族調査の成果とともに歴史語言研究所に参入することを導いたのである。傅斯年と顧頡剛らによる広州での試みが、断流しながらも、結果的には伏流となって、歴史語言研究所による西南辺境民族研究を生み出すことになったと言える。

(2) 源流その後——楊成志と広州

一方、傅斯年・顧頡剛・シロコゴロフの去った広州では、西南辺境民族の研究は、その後いかなる展開を見せたのだろうか。かつての関係者で、傅斯年・顧頡剛が主導した時期の中山大学歴史学研究所において、西南辺境民族

研究の分野で最も大きな経験を積み、その後、学術的な功績を残した人物は、上述の「瑤民」訪問一行の一人、楊成志である。彼は広東東部沿海の海豊の人で、一九二七年に広州の私立嶺南大学歴史系を卒業して中山大学語言歴史学研究所に勤務するようになった^⑳。そして一九二八年七月に、中山大学に着任して間もないシロコゴロフの助手として、雲南の獯獯（現彝族）調査に派遣されたのである。

楊成志は雲南に旅立つ直前、中山大学語言歴史学研究所の「西南民族研究」特集号のために、鳥居龍藏の『苗族調査報告』から一部を抜粋して、翻訳紹介を試みている^㉑。彼はその知識を携えて、四半世紀前に鳥居が旅した雲南の民族地帯へと、足を踏み入れたのである。

楊成志は、雲南で獯獯調査を敢行した後、一九二九年六月、昆明の東陸大学（現雲南大学）において以下の内容の講演を行なっている。

皆さん、……私がこの十日間、各中学や師範学校を行き来し、三千もの青年学生たちに民族の問題を説いているのは、要するに「雲南の人は雲南の民族に注意すべし」ということに基づくのです。……世界各国の学者の中華民族の起源についての学説をあらまし総合するなら、およそ十種ほどになりますが、ここではただその〔起源地と主唱者の〕名前だけを挙げて皆さんにお聞かせしましょう。……私たちはわが国の上古史を読み、黄帝と蚩尤の戦争があったことを知っており、黄帝は漢族の始祖で、蚩尤は苗族の始祖とされています。当時、黄帝が勝つて、蚩尤は負け、その末裔は黃河流域から長江流域へと落ち延びて、長江流域からさらに南に向かい、珠江流域まで至りましたが、後に漢族の勢力は日ましに伸張し、彼ら〔蚩尤の末裔〕は平野に住みきれず、僻地の高山地帯に入り込んでそこで暮らさざるを得なくなりました。〔広東・広西の〕南嶺や〔雲南の〕横断山脈一帯に暮らす

この種の山地民族が、すなわち私たちが現在言うところの「西南民族」なのです。……皆さん、少し考えてみてください。「西南民族」は、これほど広い地域に暮らし、またこれほど繁栄した人口をもつのに、有史以来、ついに国人の注意を引くところとはなりません。……現在「西南民族」の研究は、文化の立ち遅れたわが国では、まさに種まきあるいは萌芽の時期に相当します。皆さんご存知の通り、外国人は……「西南民族」を「Non-Chinese」と見なし……著述をなしており、外国の科学的調査者の著したものを集めると、その数は数百に達します。かえりみれば、わが国のこの種の書籍は、今なお微々たるものです。これはなんと恥ずべきことでしょうか。……学術とは公共のものであります。私は広東人でも雲南の問題に強い思いを発しています。皆さんはここに生まれ、ここに生き、ここで暮らしてきた優秀な方々です。雲南の文化の宣揚に対し、どうして責任を逃れることができましょうか（楊成志「従西南民族説到独立羅羅」一九二九年²⁰）。

楊成志は、西南辺境民族研究の必要性を主張し、地元知識人たちの注意を喚起した。その際に現れたのは、「優勝劣敗」を経た同胞としての西南辺境民族への眼差しであり、その基礎となったのは、蚩尤の末裔としての苗族が、黄帝を始祖とする漢族によって、黄河流域から西南辺境へと追いやられたとする、典型的苗族先住説に立脚した民族史論だったのである。

一九二八年七月、広州から楊成志とともに雲南羅羅の調査に向かったシロコゴロフが、昆明から離れることのないまま撤収し、それが問題を引き起こしたことについては、すでに述べた。調査を主導するはずのシロコゴロフを失ったものの、現地に一人残った楊成志は、そのとき結局単独で本来の目的地の羅羅地域に向かい、調査を進め、数多の危険と引き換えに大きな成果を得たのである²¹。結果的にこれは中国人研究者による独力での最初の中国民族調査と

なった。その自信が上の一文にも表れている。

当時、楊成志が傅斯年や顧頡剛に宛てた私信や、成果を発表した論著などを読むと、彼が現地での同行調査の中で、シロコゴロフへの反発によって、次第に民族主義的な思いを強めたことが見て取れる。彼が特に主張したのは外国人学術界からの学術権益の回収であった。⁽²⁸⁾ 中国への民族学の導入が、このような外国人研究者に対する負の評価と強い民族意識から始まったことは、前章で論じた考古学の場合と同じく、その後の斯学の展開を方向付けたのである。

楊成志が広州に戻ったとき、すでに傅斯年も顧頡剛も広州になく、その成果は言わば宙に浮いたかたちとなった。しかし楊成志は、その後、広州を去った傅斯年と密接な連絡を保ちつつも、⁽²⁹⁾ 広州を拠点に、雲南での調査成果をもとに研究を進め、広州における一九二〇年代末の学術成果を受け継ぐ役割を果たしたのである。一九三〇年代初め、広州を舞台に二度目の西南研究の高揚が起こる。その背景には楊成志の存在があったと見なければならぬ。そしてその西南研究は、以下に述べるように、地方としての特性に立ち、独特の政治的背景と問題意識とによって発展の機会を得た、きわめて特色あるものであった。

(3) 一九三〇年代広州の「西南研究」——地域主義と救国意識

一九二八年六月、北伐の結果、北京は北平へと改称されるに至り、首都は南京に定まって、国民政府の旧都広州は南方の一地方都市となった。その後、一九三〇年代初めにかけての広州は、中国の多極化する政局構造の中にあつた。一九三〇年、馮玉祥・閻錫山らとの間に起きたいわゆる「中原大戦」での勝利により、華北を初めて自らの勢力下に置くことに成功した蒋介石は、残る反蒋介石派の実力者である胡漢民を、一九三一年二月、南京で監禁する。これを

契機として、国民党内の反蒋介石派が広州に集結し、広州と南京との対立が生じたのである。ところが同年九月の滿洲事変の勃発によって、兩派は妥協による協調を余儀なくされる。そしてその副産物として、一九三二年一月、国民政府の指導下に地域の行政を監督し、国民党中央執行委員会の下で地域の党活動を監督する特別地方機関として、「国民政府西南政治委員会」と「国民党中央執行委員会西南執行部」が、広州に設置されるに至るのである。実質的には地方権力機関でもあるこの二機関を主宰したのは、広東の実力者、胡漢民であった。

そして、胡漢民とともにこの「西南」二機関の活動を担った一人が、胡漢民と同じく広東出身の実力者、鄒魯であった。鄒魯は、一九二四年、中華民国大元帥孫文の命で広州に広東大学が開設された際に中心的な役割を果たした。翌一九二五年、孫文の死を契機として、この広東大学が改称されて成立したのが中山大学である。開学の功労者である鄒魯は、広東大学の時期だけではなく、中山大学においても、「西南」二機関設置直後の一九三二年二月から、一九四〇年までの実に八年の長きに渡り、校長の任にあつて、学内体制の構築に多大な影響を及ぼしたのである。

鄒魯が校長になつた一九三二年二月、中山大学には「西南問題を研究し、西南の実状を探求し、西南文化を発揚する」ことを宗旨に「西南研究会」が成立する。その会誌『西南研究』創刊号の巻頭には、「発揚西南文化」という鄒魯の題詞が掲げられている。それに続く創刊号の本文は、以下の「宣言」で始まる。

わが国の西南の範圍は、広東・広西・貴州・雲南・四川・西康（現四川西部）・チベットを含み、土地は広く、民族は複合し、物産は豊かであり、西北や東北と同じく、国防上の要衝を占める。ただ山川が間を阻み、交流が妨げられ、民風は閉塞し、政治が弛緩しているため、これら数々の理由で、ついに美しい山河は見捨てられ、豊かな資源は埋もれて開発されず、開化を待つ辺境の民たちは野蛮な生活に身をやつしている。およそ西南の局面

を思いやる者で、この種の畸形的状況を恥ずかしいと思わない者はいない。……国難が高まり、西南の国防情勢が日ましに険悪になる中で、国家の危急を救い、科学研究を発揚し、政府および民衆を目覚めさせ、西南辺境問題に注意を向け、ともに計をなすため、本会会員は時勢の求めに応え、今次「西南研究会」の誕生をここに見たのである（無記名「国立中山大学西南研究会成立宣言」一九三二年）。

強調されるのは、西南辺境の経済的・学術的フロンティアとしての可能性と、開発の遅れに対する嘆き、そして国防上の危急という現状認識である。そこにはもはや、顧頡剛が使命感を語った一九二〇年代末のような、学術本位の姿勢は見取することはできない。それはむしろ、前章の冒頭で見た「満洲」の衝撃を経た「東北」論と、著しく相似するものである。「宣言」の中でも、「西南」の位置付けは「東北」「西北」と同列に論じられている。国際関係の緊張の中に置かれた一九三〇年代の中国において、三者についての言論が活発化し、関心の高揚が見られたのは、共時的な展開であったのである。

一方でまたこの「西南」論は、当時の広東特有の歴史的環境の中で評価すべき側面を持つ。上の「宣言」において、西南研究会が「西南」の範囲として示したのは、地元広東や隣接の広西などの領域にとどまらず、四川・チベットまでを含む広大な範囲であった。同会の成立に先立って広州に成立した前述の「西南」二機関もまた、実際には広東・広西の二省をその指導の下に置いたのみであったが、管轄権限が広東・広西・雲南・貴州・福建の五省にまで及ぶことが計画されており、胡漢民は、まだこのとき南京の実質的なコントロール下になかった雲南・貴州・四川の実力派と連絡を取ることに努め、これらの地に「新国民党」の組織を発展させ、三省の加入によって「西南連合」とでも呼ぶべきものを実現し、反蒋介石の勢力を拡大しようと望んでいたとされている⁽²⁵⁾。同時期に、ともに広州を舞台として

現れた学術界・政界の「西南」論が、同様な空間認識の下に展開されていたことは注目して値する。「西南」二機関の活動を担った鄒魯が校長を務め、影響力を持った中山大学を拠点に、時を同じくして「西南研究」が高揚したのは、当時の広東における政治環境と無関係ではないと見るべきであろう。⁽²⁶⁾

(4) 一九三〇年代民族学者の苗族史論——苗族先住説の超克

では、この時期の研究者たちの西南辺境民族観には、前章で見た一九二〇年代末のそれと、どのような違いが認められるのであろうか。前述の『西南研究』創刊号には、楊成志による以下の一文が見える。

西南民族とは、広東・広西・貴州・雲南・四川・西康（現四川西部）・チベット、およびインドシナ各地のすべての半開化あるいは未開の各部落の総称である。簡単に言えば、世に俗称するところの「南蛮」あるいは「苗族」あるいは「苗蛮系」である。この族は、漢族が西北から移入して黄河流域に繁殖した後、「優勝劣敗」と「弱肉強食」の進化（競争原理）の支配の下、時間的経過によって徐々に淘汰され、空間的圧迫によって南に追いやられ移り住んだとされる。……ああ、中原の主人公は蹂躪される山地民に貶められ、新興の漢族が中華の黃裔となつた。当時の黄帝と蚩尤の戦争の伝説を思えば、その勝敗がついには数千年来の漢族と苗族の命運を決定したのであり、まことにこれを慨嘆せずにはいられないのである（楊成志「西南民族的研究」一九三二年⁽²⁷⁾）。

ここに示される「西南」の範囲は、先の「宣言」のそれを踏襲するものであり、さらにインドシナ半島にまで広がっているのは、楊成志が立脚する民族学の学術的見地によるものであろう。そこに見えるのは、先の楊成志「從西南民族説到独立羅羅」（一九二九年）と同じく、伝統的な「優勝劣敗」式の苗族先住説に立つ西南辺境民族観である。前稿

で見たとように、歴史学の分野では、この時期すでに考古学や上古史研究の新たな成果を受け、土着史観への転回が始まっていた。民族学の分野ではこうした先住民史観が一九三二年の段階に至っても色濃く残り、またそれが現状の危機意識に裏打ちされた「西南研究」への趣旨と、矛盾なく並存しえたことが注目される⁽²³⁾。

その同じ時期に、上述したように中央研究院社会科学研究所の凌純声・芮逸夫による苗族調査が、「西南」の外延の地である湖南西部で行なわれている。当時の彼らの民族史観については、今のところ知る手掛かりを欠くが、調査に際しては、当然、鳥居龍蔵などの外国人東洋学者の業績や、楊成志などの国内学者の業績が参照されていたであろう。

鳥居龍蔵の苗族報告『苗族調査報告』の中国語訳が国立編訳館によってなされるのは、一九三五年のことである。なぜこの時期に、政府機関によって鳥居の業績が翻訳されたのかについては、訳序に「近年来、政府がようやく辺境の重視と防備を行ない、辺境民族についてもその生活や文化に改善を加えようとするようになっており、本書の翻訳は国家民族に裨益するところがある」とあり、辺境政策に資するという意図があったことが読み取れる以外、明らかでない。しかしその背景に、上で見た「西南」論の高揚や凌純声らによる苗族調査の実績があったのは、疑いがない点であろう⁽²⁴⁾。

出版された鳥居の訳書に対する中国国内の反応は、中山大学で楊成志の指導を受けた江応樑が、一九三七年に広州で発表した書評によって、その一端を知ることができる⁽²⁵⁾。江応樑は、鳥居の成果に対して学術的な功績を高く肯定的に評価する。しかしその一方で、本訳書を通じ、その記述の根底にある、漢族と苗族の歴史的対立を基軸とした民族観が、科学的根拠あるものとして社会に流布することへの警戒を、以下のように述べている。

苗族は本来中華民族の一個体であつて、中華民族を強いて五族あるいは六族に区分するのはもはや無意味であ

り、漢苗族やモンゴリア種（モンゴロイド）ではなくて別の民族に属すると言うことなどは、もつてのほかである。……鳥居氏は「外国人による旧来の」諸々の主張に対して論評を加えていないが、苗人の体質構造から、それがモンゴリア種であると認めており、……その立論の出発点は、比較してきわめて客観的である……。およそ外国人がわが民族を研究した書籍は、学術的貢献については、確かに敬服させられずにはいられないが、種族上の見解については、往々に知らずして主観的色彩をまじえている。鳥居龍藏氏のこの書は、きわめて客観的な態度に基いて書かれているが、欧米の学者の苗族非中国民族論を引きながら論評を加えていないのは、「そのまま翻訳された部分を読んだ中国の」読者に悪い印象を与えやすい。中国の歴史書の「苗夷民族は我が族類にあらず、其の心必ず異ならん」という認識は、今日の私たちはまさにその誤謬を正して改めなければならないものであるのに、もしこの上、外国人の主張する苗族と漢民族が（歴史的に）対立する二つの民族であるとする論調を読んで、「そこに訳者による批判的」判断を加えなければ、まさしく前門に虎を逐い、後門に狼を入れるようなものである。もし本訳書に詳細な序言を付し、この種の部分に意見を提示したなら、読者の認識の上で、きわめて大きな助けとなりえない（江応樑「評鳥居龍藏之苗族調査報告」一九三七年四月）。

一九三〇年代後半、民族学者たちが、苗族の位置付けに対して敏感となり、旧来の学院を批判する態度を明確にするようになっていたことが読み取れるのである。⁽²⁾

(5) 中央アカデミズムの中の苗族史論——『湘西苗族調査報告』

この時期、鳥居の『苗族調査報告』訳書の刊行に続いて、中国人研究者独自の苗族調査の成果としてまとめられた

のが、凌純声と芮逸夫による『湘西苗族調査報告』である。その記述は、以下のように始まる。

この百年來、西洋の宣教師がわが国に伝道し、外国の学者が旅で中国を訪れ、少なからずの民族学および言語学の調査をなした。彼らが発表した論著は、學術研究に資するものが非常に多い。しかし湘西（湖南西部）の苗族は、今に至るまでなお欠如として付されたままである。日本人の鳥居龍藏氏は、一九〇二年にわが国の西南各省を旅して、苗族の生活を实地に調査したが、湘西を通過したものの、苗区（苗族地域）に入つて調査をするこゝができなかつた。ゆえに湘西の苗疆（苗族地域）は、今なお民族学調査の処女地と言えるのである（凌純声・芮逸夫「序言」一九四〇年⁽²⁸⁾）。

上文でまず提起されるのは、本成果が、鳥居龍藏に代表される近代以来の外国人らの調査成果の空白を生めるものであるという点である。そしてそれが単に空白を埋めるのみならず、成果としても彼らによる既存の学説を超越するものであることが、同「序言」で凌純声による起草とされている本文第一章の以下の記述において、まず見取り図的に説明されるのである。

近ごろの中国民族史を研究する者には、今の苗族がすなわち古代の三苗の末裔であると説く者がいるが、……今と昔の苗が、同一の族類であるか否かについては、『戦国策』の数語の記載や、その名称の用字が同じであることとで、断言できるものではない。だから、私たちはまず苗の名称について研究しなければならぬ。これによつてはじめて、いにしえの苗と今の苗との違い、および狭義の苗と広義の苗との關係を明らかにすることができるのである。

章（炳麟）氏の後、いにしえの三苗が今の苗族であるとする説を批判する者は日ましに多くなり、なかでも朱

希祖の説は、証拠（として挙げてゐるもの）が比較的多い。……こうして私たちは、三苗が国名であつて、種族の名ではなく、さらに今日の苗でないことを知るのである。しかしながら、国があれば民がいるのだから、その人民の種族はいつたい何〔族〕に属したのか。……いにしへの三苗は、炎帝末裔の姜姓の〔統治する〕国であり、すなわち西羌の大本である。古代の三苗国は、古典の記録によれば、疆域がきわめて広く、……この広い区域において、その土着民族は、あるいは一つにとどまらないのかもしれないが、その主要な者は、旧説によると、九黎である。九黎の君主は、少昊の時には蚩尤がいて、堯の時には苗民がいた。蚩尤と苗民は、二つの異なる時代における九黎の統治者であり、統治された民族とともに九黎であつた。……三苗の君主と民が実は同族でなかつたことが読み取れるのである。

今の苗が古代の苗あるいは三苗でなく、三苗の民が九黎であつたとすれば、以下の問が生ずる。今の苗は古代の九黎ではないのか、と。近人の呂思勉は、古代の九黎がすなわち後世の蛮であり、蛮が音を転じて苗になつたとする。……私たちが知るところでは、黎・蛮・苗の三者は、今日の現実の材料をもつて証すると、それぞれが異なるのであり、同一の族類であるとは決して認めることはできない。

今の苗がいにしへの髦であるとする説は、章炳麟氏に始まる。……おおよそ髦は春秋以後、戦国の混乱と〔秦末の〕楚漢の抗争によつて、徐々に〔黄河流域の〕山西・河南から〔四川の〕巴・蜀に移り、後にまた巴・蜀から〔四川南部の〕越嶲に移り、……また越嶲から今の貴州に入ったのである。……宋・元の間、貴州に久しく暮らし、〔mu〕と自称する民族は、漢族との接触が次第に多くなり、漢人はそれが古代の髦あるいは髦であることがわからず、その族を蔑視して、それが自称するところの音が「猫」「貓」などの漢字音に近いことから、それ

をもつて「彼らを「猫」「貓」と」名付け、あるいはまたこの「nu」^[nu]と自称する民族を、古代の三苗の末裔であると思ひ、それでまた「苗」の字をもつてそれを名付けたのである。……明清以来、多くが古代の苗を今の苗族に付会し、それで「猫」あるいは「貓」字は用いられなくなり、苗の名称が固定化したのである（凌純声「苗族名称的演变」一九四〇年）。

ここでは、何よりも鳥居が調査時に関心の大本に置いた、漢族西來說と表裏一体化した典型的な苗族先住説が退けられている。そして、先に第四章で見た呂思勉による上古の「三苗国」の民族構成を構造的に把握する視点が継承され、中原の五帝と争つたとされる蚩尤や苗民がその支配層、九黎が非支配層とされるのである。ところが問題の中核である今日の苗族については、呂思勉のようにそれを九黎と結びつけず、むしろ章炳麟の旧説を一部継承する。すなわち、歴史上の「鬻」「鬻」が、黄河流域から長江上流域に向かって徐々に南下し、貴州方面に遅れて入つた後に、苗という呼称が誤解から生まれ、今日に至つたものとするのである。

これによれば、長江流域の最古層に位置付けられる集団は九黎であるが、それと今日の苗族は民族系統として無関係であることになる。今日の苗族の源流は黄河流域であるものの、後から現住地に入つた後裔の集団にすぎず、ましてや黄帝と蚩尤に象徴される上古の「民族対立」は、今日の苗族とは何の関係も持たないことになるのである。同時期の江応樑による問題意識と、方向性を同じくする内容である。前稿で論じた歴史学の領域よりはやや遅れたものの、民族学の領域においても、一九三〇年代後半には苗族先住説からの脱却が課題として意識され、独自の歴史叙述が試みられるようになっていたのである。

(6) 凌純声の華南民族史像

しかし、上文を読む時、意外な思いを禁じえないのは、民族調査の成果をまとめた民族誌でありながら、調査の実関係の記載に入るより前に、民族系統についての詳細な歴史的考証がなされ、またそこに民族伝承や祭祀体系などの現地調査の成果が反映されることがないという事実である。民族学者が書いた民族誌でありながら、その実体はまるで文献史学者が書いた歴史考証の感さえある。苗族の現状を調査し叙述することと同等に、その民族系統の解明が重視されており、そのために民族誌であると同時に、また民族史論としての性質を備える結果となっているのである。文献に基いて民族系統を追究する凌純声は、同文中で以下のようにも述べている。

〔いにしへの〕九黎は、長江以南から、五嶺を越えて、広東・広西を経て、今の海南島に退去した。近人の考証によれば、今日の海南島の黎は、大陸から移動してきたものであり、その種族はタイ・シヤン族〔タイ系民族〕で、今日の広西の獯人〔現壯族〕・土人〔現壯族〕や雲南の擺夷〔現傣族〕・儂人〔現壯族〕などが、同一系統の民族であると考えられる。

〔だから九黎は〕蛮でも苗でもない。……苗と蛮の音が近いということは、呂〔思勉〕氏が言っただけではなく、日本人の鳥居龍藏の『苗族調査報告』……もまた多くこれを言うが、……今日の現実の資料をもつて証すると、二者が同一の族類でないことは、ここで繰り返すまでもないのである。

蛮は三代〔夏・殷・周〕以前は〔黃河流域の〕河南西南部に暮らしていた。……周の世になると、その族は強勢となり、長江・漢水流域を占拠して、荆蛮と呼ばれた。……漢の時は長沙の武陵蛮であり、唐初にはもはや蛮の呼称がなく、莫徭の名が現れた。宋に至って蛮徭あるいは徭人と呼ばれるようになり、その頃にはこの族はす

で五嶺を越えて南に移り、広東・広西の地に分布していた。後にまた二手に分かれ、東支が広東から福建・浙江に入つて畚民と呼ばれ、西支が広西から雲南・ベトナムの国境地域に入つて今なお蛮の旧称を残し、湖南・広西に留まった者はおもも僛人（現瑤族）と呼ばれているのである。筆者の調査の及んだところでは、かつて見た浙江の畚民、広西の僛人、および雲南・ベトナム国境の蛮人は、今も家で「高辛氏勅封忠勇王」の位牌をなお多く祀り、同じように槃瓠（盤古）のトーテムを信奉していた。その言語は、畚民が客家語に非常に近いものを話すほかは、僛・蛮の二者は、多くが大同小異であり、それが一つの族類であることは疑いないのである（同上）。

ここでは、いにしえの「三苗国」の被支配層である九黎の末裔が、今日の苗族ではなく海南島の黎族であることが論じられる。それが今日の広西・雲南に散在する壮族・傣族などタイ系諸族の一部であるとされるのは、新たな視点である。そしてかつて章炳麟が今日の苗族と結び付けた歴史上の「蛮」については、中原から長江中流域に向かつて徐々に南下したもので、その末裔が今日の浙江・福建・広東・広西・雲南に散在する畚・僛・蛮であると説明される。こうした議論が生まれた背景には、苗族先住説の克服が広義の「苗」概念の整理をともしうものとして進展したことがある。

凌純声は同文の冒頭部分で以下のように述べる。

苗という名は、世の中では多くが中国西南民族の総称と考えているが、実際のところ、今日四川・雲南・湖南・貴州・広東・広西の〔西南〕諸省の非漢民族は、名称が非常に多く、百数十種を下らない。……苗族は……〔その中の〕一系統にすぎず、西南民族全体を包括することはできないが、すぐには糾正するのが難しく、私たちは苗の名称に広義と狭義の二つがあることを認めざるをえないのである。広義の苗とは西南民族全体の汎称であり、

狭義の苗とは本當の苗で、あるいは純苗とも称される。「これらのうちで」本書が研究するのは、狭義の純苗であつて、広義の苗族ではない（同上）。

當時の中国国内では、新進の民族学者たちによつて、民族系統の分類と体系化の試みが新たな成果を上げていた。²⁸⁾ 上文における凌純声の華南諸民族の系統に対する関心も、そうした中に位置付けられるものである。凌純声の議論を総合すると、長江流域の最古層の集團とされた黎族と、後から現住地に入った後発の集團にすぎないとされた今日の苗族との間に、今日の瑶系諸族の展開が織り込まれた、タイ系諸族・瑶系諸族・苗族が年代順に重なりあう、重層的な民族史像が浮かび上がる。これは、民族学の進展を背景に民族系統の分類が進む中で、苗族概念が整理された結果、旧来においては苗族先住説として一括されていた各種の華南民族史論が、最新の民族学説を踏まえて一つの時間軸の中に分割され、定位しなおされたものとして評価されるのである。

(7) 苗族と赫哲族のあいだ——民族学者の中国民族史像

民族誌でありながら同時に民族史論でもあるという特徴は、苗族調査報告書に先立ち、凌純声によつて執筆された赫哲族の調査報告書にもあてはまる。その第一章「東北的古代民族与赫哲族」は、以下のような記述で始まる。

現在中国で民族史を研究する学者は、大部分が欧州の漢学者の衣鉢を継いで、今のツングース〔系諸民族〕がすなわち古代の〔中国古籍に見える〕東胡であると、まったく疑わずに信じている。……ツングースすなわち東胡とする説は、ほとんど現在の学者一般が公認するところの定説となつており、民族史の研究に影響するところがきわめて大きい。筆者のもともとの考えでは、赫哲族〔そのもの〕についての考証をしたいと考えていただけ

であったが、ツングースすなわち東胡とする公然たる誤りを糾正し、大本を一掃するという見地から、ツングースと東胡の「歴史的」関係について議論を行なわざるを得ないのである。……考証によって得られる結論は、ツングースは東胡の音訳ではなく、……東胡は匈奴と同じく蒙古種に属する、ということである。

現在、中国の上古史を研究する人はすでに、中国民族が一元的に出自したという考え方を打破しており、たとえば顧頡剛は、古代の商（殷）民族と周民族とがそれぞれに「異なる」始祖を持つと考えている。また多くの人たちが、古籍中に残されている材料によって考証し、地下から発掘された古代の遺物によって研究し、社会組織から推測を行なうて、商・周は同一民族でないと考えている。彼らの証拠は日ましに増え、次第に私たちはそれを信じるようになっていく。……これらの説は、きわめて重要な中国民族の起源という問題を引き起こす。すでに知られているように、古代に渤海の周りにいた民族は中国古籍がいうところの東夷であり、商民族はこれに起源したのである。簡単に言えば、商民族は東夷、少なくとも東夷の一支と言えるのであり、だから中国文化の創始者はすなわち東夷なのである。

十七世紀以降、キリスト教の宣教師たちが中国に伝道にやっ来て、中国の文化を探索し、中国民族西来の説を提唱した。その後、東西の学者たちは、中国民族の起源問題について、西来、南下〔北来〕、北上〔南来〕の諸説紛糾となり、総計すると十余説を下らない。……筆者は……商民族が中国文化の創始者であるとする説を信じ、かつ商民族はすなわち東夷に出自すると考える。それゆえに中国文化の起源問題について、「東夷起源説」あるいは「環渤海湾発生説」、さらにまとめると「東来説」と名付けるべきものを主張し、いわゆる西来・南下・北上の諸説は信じないのである。

それでは東夷とは一体どのような民族なのか。……諸説を総合的にみると、中国古籍に記載される東夷は、実のところ古アジア〔Palaeasiatics〕とツングースの二つの民族を含んでいることがわかる。前者は満洲・朝鮮および中国沿岸一帯（あるいはアジア大陸の東北全域と言える）に暮らしていた原始住民で、後者は他所から移ってきたものである。〔殷人などの〕古アジア人は、〔西の黄河上流域の〕周民族、〔北方の〕ツングースおよび蒙古の諸民族の圧迫を受け、一部が〔それら〕侵入者によって同化され、一部が今日のアジア極東北の地に退去し、それが現存のチュクチ、コリヤーク、エスキモー、カムチャダル（イテルメン）、ユカギール、アイヌ、ギリヤーク（ニヅフ）などで、ともに該族〔古アジア人〕の末裔なのである。……ツングースの起源地については確定できないが、彼らが満洲に移入したのは、〔満洲から見て〕西北からであったことは、きわめて明白である。……おおよそ古代から漢・魏以後までは、〔アジア〕東北大陸の東夷は、古アジア族が主要な民族であり、隋唐以降になつて、ツングース族が古アジア族に代わつて、東夷民族の主体となつたのである（凌純声『松花江下游的赫哲族』一九三四年）。

このように凌純声は、ツングースすなわち「東胡」とする外国人東洋学者らの説を批判し、それを「東夷」の一種と見なすことを主張した。また、顧頡剛に代表される疑古派の上古史観を援用して、「商民族」はすなわち東夷であると論じ、外国人東洋学者らによる中国文化西來說・南來說・北來說をともに退けて、渤海沿海の東夷起源とする「東來說」を主張したのである。そしてその民族史論の基軸にあるのは、東夷の一種である「古アジア人」が黄河下流域から東北・朝鮮方面にかけて広く先住民として暮らしていたところに、西方や北方から「侵入」を受けて辺境への退去を余儀なくされ、その末裔が今日のアイヌ民族を含む極東の諸民族であるとする、典型的な先住民史観である。こ

これらの論点はいずれも北方にかかわるものだが、その中に本稿でこれまで考察してきた近代以来の苗族史論と重なるものが少なくないことが容易に見て取れよう。

「古アジア人」という概念を軸に極東民族史の最古層を論じ、それと区別される後発の存在としてツングースを民族的に位置付ける視点は、シロコゴロフの視点を継承するものに他ならない。シロコゴロフは漢族西來說に引きずられ、漢族の「西来」によって、中原の先住者であるツングース（原ツングース）が、漢族の「西来」によって圧迫されたことで、もともと黄河下流域から中国東北部にかけて存在していた「古アジア人」が、朝鮮半島から極東の辺縁にかけての地域に追いやられたと理解していた。凌純声は、漢族西來說を排除して、それを殷周交替に読みかえ、またツングースを北方起源とした以外は、基本的にシロコゴロフの考え方を継承し、黄河下流域から東北にかけて一連の土着民族が存在したことに重点を置き、上記の民族史論を展開したのである。

凌純声によるこの民族史論の基調となるものは、本報告書刊行の二年前に世に出た、上述の『東北史綱』での傅斯年による議論と一致している。そこには、中国東北部が先史時代から内地と一体となつて民族史的展開を遂げてきたとする明確な主張がある。そしてそれは、彼が实地に調査した赫哲族のみならず、満洲族などのツングース系民族が、後から中国東北部に「侵入」した存在にすぎず、日本の鳥居龍蔵や矢野仁一が主張していたような「満洲」の先住者ではなかったという主張を含意していると考えられるのである。

以上の理解をもとに先の凌純声による苗族報告書での議論を振り返ると、二つの報告書の記述には、実によく似た特徴が認められる。ともに批判の矛先を向けるのは、「欧州の漢学者」、すなわち近代以来の外国人東洋学者らによる民族史論である。それを批判することによって、それぞれの地域の先住者が、中国内地の漢族とは系統を異にするツ

ングースや、黃河流域から漢族に追い払われて南下した三苗の末裔ではなく、それぞれの地に、それらとは別に土着民族として存在していた民族であることが主張される。近代中国の民族学を代表する「西南」と「東北」の民族誌として評価されてきたこれら二つの著作には、土着史観に立った民族史論として、共通する特徴が認められることが明らかとなる。

(8) 民族誌と民族史——民族学者と歴史叙述

二つの著作が描き出す民族史論は、その内容についても共通性が認められる。南北それぞれの記述を統合すると、中国民族史像の全容が以下のように浮かび上がる。まず、中国大陸の最古層として、華北から中国東北部にかけては古アジア人、華南には九黎がいた。黄河上流域から周族が東進するに前後して、古アジア人はそれに同化、もしくは中国東北部さらには極東の地に追いやられ、また蛮が長江中流域に南下したことによって、九黎はタイ系諸族として中国南縁部に広がった。そしてそれよりも後の出来事として、中国東北部にはツングース系諸族が北方から移り住み、古アジア人の末裔はアイヌ民族を含めて極東の地に散在するのみとなり、貴州から湖南にかけての地には、四川方面から髦（髻）が移り住んで苗族となり、浙江・福建方面では蛮の末裔の一派が畚族となり、広西・雲南方面ではもう一派が瑶族となった、というものである。

これは、一見すると、鳥居龍蔵や梁啓超などによる先住民史観に立った民族史論と大差ないように見える。古層の集団が最も辺境に押し出されたとき、南北の差を越えて、苗族とアイヌ民族が相似した歴史的位付けを得るといふ点においてである。しかし、鳥居の中国史論は、漢族西來說と苗族先住説にとらわれていた上に、肝心の漢族への

関心と理解をまったく欠いたものであった。⁽²⁶⁾ またこれと正反対に、清末民国初年の梁啓超による中国史論は、多民族史論という体裁はとるものの、実体としては漢族の歴史的関心を出発点に、漢族による非漢族の一元的同化を軸として論じられたものでしかなかった。一九二〇年代における呂思勉・顧頡剛の議論も、考古学の成果を摂取し、もしくは上古史伝承の多系的理解に立脚していたとはいえ、出発点にあったのは漢族史論としての関心であった。

本稿でこれまで論じてきたように、一九三〇年代において、民族学という学術が各種実践を展開する中で、民族史論はそれまでとまったく形を変えた。そこに描き出されたのは、周辺民族間の関係史まで視野に入れ、動態としての視点がより顕著な、一元的でもなく多系的でもない、複合的な民族史像であったのである。

そうした民族史像が、旧来のように単純な進化論的歴史観の中で、「優勝劣敗」と「同化」の論理に照らして、漢族との相対的関係を導き出すという性質のものとしてではなく、現状に即した民族系統の整理の一環として描き出されたという点に、民族学者による民族史論の特徴を認めることができる。この時期、民族学者は、民族系統を検討する作業の中で歴史的な考察を盛んに行ない、⁽²⁷⁾ また中国民族通史をも執筆した。⁽²⁸⁾ 長江流域や西南辺境地域の典籍史料には限界があり、これらの地域の考古学成果もまだほとんどない状況にあつて、辺境民族を含めた中国民族史論は、以後、民族学者と彼らによる成果を中心に描き出されていくことになる。民族学者による民族史論という歴史叙述のあり方が、こうして誕生したのである。

(9) 「東北」から「西南」へ

現状から時間を溯上する民族学者たちの歴史意識は、政治的現実と分かちがたく結びつく。先に述べたように、そ

もそも一九二〇年代末から一九三〇年前後に、民族学という学知が制度化され、フィールドや研究対象が大きく広がったのは、政治状況の変化による学術体制の確立と、実効支配領域の変化を背景としたものであった。そして現実との関係性の強さは、民族学者自体の問題意識にも反映されていた。楊成志の場合、一九二〇年代末には、現地社会への啓蒙に対する使命感が強く認められた。そして一九三〇年代初めには、地元広東政界を巻き込んだ「西南」論の一翼を担うものとして、辺境民族への関心が救国意識と連結された。辺境が置かれた社会的現実や政治状況が、楊成志の問題意識には明瞭に見て取れたのである。

上で見た民族史像のあり方からは、楊成志と同時代を生きた凌純声にも、同様な問題意識を読み取ることができよう。そしてまた、そこにはある種の政治的要請が反映されていたことが、後年、傅斯年が凌純声『松花江下游的赫哲族』の出版経緯について回顧した、以下の記述によってわかるのである。

記憶しているのは、五、六年前に弊所〔中央研究院歴史語言研究所〕が、凌純声先生の赫哲族についての研究を刊行した時、わたしは「赫哲民族」という言葉を使わないようにつとめて主張しました。当時、こうした感覚を持ったのは、「民族」という言葉の定義が「民族主義」の本〔孫文の『三民主義』の一節〕の中にもともと備わっていて、この本が〔孫文の遺志を受け継ぐ国民政府の統治下の〕今日においては、法的な効力をもっているのであるから、政府機関の刊行物はとくに、これと相違することがあつてはならない、という理由によるものでした（傅斯年「致顧頡剛先生函稿」一九三九年）。

満洲事変から間もない時期、「東北」の赫哲族は、「民族」ではなく「族」であることが明確にされなければならなかった。そしてそれを方向付けたのは、傅斯年だったのである。凌純声の苗族史論もまた、同じ力学の中にあつたと

見る必要があろう。⁽²⁰⁾

ここでいう「民族」とは何か。それはネイション(Nation)としての中国民族に他ならない。「満洲」の衝撃を経て浮き彫りとなった「国土」や「国民」という枠組みの脆さを、傅斯年や顧頡剛らは察知して、本稿の冒頭で見た救国意識に立った学術実践を提唱し、自らその先陣を切った。その後、一九三六年五月に国民政府による議論を経て発表された憲法草案修正案では、清末以来の各種「憲法」とは異なり、新たに省名が列挙されるかたちで中華民国の領土が明示され(第四条)、当時実際には「満洲国」の統治下にあつた東北各省がその内にあることがまず主張され、それに続いて「中華民国の各民族は均しく中華国族の構成要素で、一律平等である」(第五条)という規定が見えている。⁽²¹⁾領土の明確化と分かちがたく結び付いたものとして、「中華国族」という概念が出現したのである。ネイションである「中華国族」(傅斯年の「民族」と、その下位の構成要素である「民族」(傅斯年の「族」との関係は、この時期、こうして公的に規定されるに至った。

これに先立つ時期にすでに同様な問題意識が表出していたことを、『松花江下游的赫哲族』の執筆をめぐる、上の傅斯年の回顧は暗示している。一九三〇年代後半に、苗族の位置付けをめぐる、民族学者らによる旧来の学院への批判や、学術ナショナリズムが噴出したことは、先に確認した通りである。それを清末民国初年の章炳麟らによる国粹主義に立つ批判と区別するものは、新進の民族学者たちが、辺境地域での学術実践に基いて発せられたものであるという点にとどまらない。凌純声は、赫哲族については極北までの空間的広がりの中に位置付けて論じたが、苗族について論じた頃には、国境の内側だけの議論に終始するようになっていた。「国族」を前提とする新たな民族史像を構築していくことが時代要請としてあり、⁽²²⁾その中に苗族を位置付けることを意識して発せられたものであるという点こそが、

この時期の苗族史論の特徴なのである。

しかし一方で、民族学者が行なったこれらの学術実践は、辺境社会において、「国族」構築に貢献するという目的とは、正反対の反応を呼び起こすという結果をも同時にもたらした。

辺境社会に分け入った民族学者の活動は、彼らを支援した地元知識人や苗族エリートを刺激し、現地における地域・民族意識の覚醒を促したのである。凌純声と芮逸夫による湖南西部における苗族調査について、苗族代表の石青陽なる人物が、「苗族を古陋であるとして、多方面で収集を行ない、映像を撮影すること、それを談笑の資、娯楽の具、謀利の用とした」と批判したのは、それを象徴する出来事であった。

辺境民族の側からの異議申し立ては、調査活動への批判にとどまらなかった。他者としての議論に終始してきた苗族史論もまた、この時期、自己認識をめぐる言説に取り込まれて苗族地域独自の展開を遂げたのである。憲法草案が誕生し、憲政の実施へと中国社会が向かう中、国政への参加と権利拡大を要請する地域・民族エリートの側から、新たに苗族史が発信されるようになっていく。

また一方で、「国族」を前提に、その実体とその成り立ちを追究する民族学者たちの試みは、さらに国境の外との摩擦を生み出す土壌ともなる。先に見たように、一九三〇年代には、民族学者を中心とする民族史論の中で、旧来の苗族史論が解体され、タイ系民族という新たな民族史の基軸が生まれた。²⁰ 華南民族史論において、タイ系民族史は、旧来の苗族史に代わる重要性を持つようになったのである。ところがタイ系民族は、国境の外にも広がっている。同じことは苗族にも言えるが、苗族は国境の外に小規模認められるに過ぎず、単独では国家を形成しない。それに対して、現今のタイ系民族や歴史上の「百越」という存在は、シヤム（現タイ）・ベトナムという国家を形作る主要民族の歴史

に連接するのである。戦火の広がりの中で、中華民国政府は西南内陸部へと移転を余儀なくされ、中国を取り巻く国際環境の焦点は「東北」から「西南」へと移り変わる。「国族」を前提とした中国民族史論は、中国国境の外に広がる東南アジア世界との関係の中で、新たな火種となっていくのである。（以下、続篇）

【註】

(158) 拙稿「苗族史の近代（三）」北海道大学文学研究科紀要 一二九、二〇〇九年。なお、本稿で以下に引用する史料の中には、国内の公的機関に収蔵されていない、あるいは所蔵機関の少ない図書・檔案などが一部含まれる。これらの史料については、読者の利便を考慮し、可能な限り、註に原文を収録する。ここでは常用漢字化を原則とし、句読点については筆者が新たに加えたものもある。

(159) 前掲注113呂思勉『中国民族史』、『中国民族演進史』、『本国史答問』、『先秦史』、前掲注144常乃惠『中華民族小史』、および羅香林『高級中学本国史』正中書局、一九三五年。

(160) この問題については、前掲注152小倉芳彦「顧頡剛と日本」、彭明輝『歴史地理学与現代中国史学』東大図書公司、一九九五年、前掲注20拙稿「歴史学者と『南支那』」、および前掲注157拙稿「歴史学者と国土意識」参照。

(161) 陶希聖「傅孟真先生」、『中央日報』一九五〇年十二月二三日（国立台湾大学紀念傅故校長籌備委員會哀輓錄編印小組編『傅故校長哀輓錄』国立台湾大学、一九五一年、および傅榮成『傅孟真先生年譜』伝記文学出版社、一九七九年所収。滿洲事変の勃発した一九三一年当時、兼任講師にすぎない傅斯年が、「参謀」として蔣夢麟（北京大学校長兼史学系主任）を支えたことについては、蔣夢麟「憶孟真」、『自由青年』八、自由青年社、一九五〇年（筆者未見。前掲『傅故校長哀輓錄』および『傅孟真先生年譜』所収）。

(162) この時の通史編著の計画は実際に存在し、抗戦下の重慶政権においても課題として意識されていた。文言から一九四〇年代初め頃に書かれたと見られる陶希聖の傅斯年宛ての私信には、「中国通史の編輯は、抗戦前に北京大学史学系が、かつて検討して結果の出なかつたもので、清華大学では張蔭麟がかつて計画しましたが□□でした。今日学校が教科書や自修用で使うことのできる中国通史は、良書が絶無と言えます。……今次の大戦は文化戦です。国民に文化戦の実質を理解させ、外国に中国文化の何たるかを理解させるた

- めにも、(通史の編集は)切に必要なことです(中国通史之編輯、抗戦前北大史学系曾有会商而無結果、清華方面張蔭麟兄曾有企圖而
 □往矣、今日学校能用為課本及自修之中国通史、可謂絶無善本、……此次大戰為文化戰、欲使國人了解文化戰之實、欲使外國了解中國文化為何□、亦為切要之事)とある(中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館藏傅斯年檔案・I—155二「陶希聖致傅先生信」)。
- (163) この刊行計画が短期間で進められ、滿洲事變の二ヵ月後にはすでに着手されていたことが、中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館藏史語所檔案・元二二一五「本所致函總辦事処(一九三二年十一月二〇日)」に、「本所最近著手編著關於東三省及熱河之歷史刊物」という文言が見えることよって推測される。当該シリーズの第一冊(傅斯年『東北史綱(初稿)』第一卷 古代之東北)国立中央研究院歷史語言研究所、一九三二年十月初版)が、実際には傅斯年一人の執筆になるものであったことについては、王汎森「説『傅斯年檔案』札記」『当代』一六、合志文化事業公司、一九九五年(『中国近代思想与學術的系譜』聯経出版事業股份有限公司、二〇〇三年所収 参照。同書の英訳節略本である Li Chi (李濟), *Manchuria in History: A Summary*, Peiping Union Bookstore, 1932 (“Second Impression”)の奥付には「中華民國二十一年九月廿日付印、中華民國二十一年十月一日再版」とあるが、裏表紙には『東北史綱』の出版予告として「此書中文本……將於(中華民國)廿一年五月中出版」とあり、これよって『東北史綱』中文本の初版原稿が、リットン調査団滞在期間中に相当する一九三二年五月以前にすでに完成を見ていたことが推測される。なお、一九三二年十二月十四日、傅斯年は「上古東北之民族」と題する講演を清華大学で行なっており、その内容は刊行されている『東北史綱(初稿)』第一卷の中文本と一致する(朱喬森編「日記(上)」、『朱自清全集』九、江蘇教育出版社、一九九八年)。
- (164) 前掲注163傅斯年『東北史綱(初稿)』第一卷。
- (165) 傅斯年「序」前掲注161李濟ほか編『城子崖』所収。
- (166) 前掲注163 Li Chi (李濟), *Manchuria in History* 参照。
- (167) この問題については、矢野仁一『滿洲国歴史』目黒書店、一九三三年、清水美紀「一九三〇年代の『東北』地域概念の形成」『日本植民地研究』十五、日本植民地研究会、二〇〇三年、前掲注163島田美和「顧頡剛の『疆域』概念」、および前掲注167拙稿「歴史学者と国土意識」参照。
- (168) 矢野仁一「滿蒙歳は支那本来の領土に非る論」『外交時報』四二二、外交時報社、一九三二年。
- (169) 前掲注167矢野仁一『滿洲国歴史』。

苗族史の近代（四）

(170) 傅斯年の議論が依拠した遼東での考古学的成果が、濱田耕作など、日本の東亜考古学者たちの主導で行われた貔子窩遺跡の発掘によるものであったことは、歴史の皮肉なめぐり合わせと言うべきであろう。戦前日本の東亜考古学の概況については、前掲注122水野清一『東亜考古学の発達』、前掲注126拙稿「近代中国と東亜考古学」、『東亜考古学之形成与中国近現代学術之興起』参照。なお、矢野の「満洲」史に関する研究成果は、「排満」主義全盛の清末の革命派知識人による言論の中では、むしろ積極的な価値が認められ援用されていたことにも、注意が必要である。章裔（劉師培）「辨滿人非中国之臣民」、『民報』十四、一九〇七年参照。

(171) 今日の中国考古学の成果は、遼東半島南部が中国内地と連動する先史文化の展開を見せたこと、その反対にそれより北の東北内陸部の先史文化には、内地と異なる特徴が顕著であることを明らかにしている。傅斯年が遼東南部の事例をもって中国東北部全体の先史時代を説いたのは、今日から見れば過大評価と言うべき議論となる。

(172) 無記名（顧頡剛・譚其驤）『発刊詞』『禹貢半月刊』一、禹貢学会、一九三四年。本史料については、前掲注125小倉芳彦「顧頡剛と日本」、村田雄二郎「中華ナシヨナリズムの表象」、『江戸の思想』八、ペリかん社、一九九八年参照。この「発刊詞」が、譚其驤の草稿に顧頡剛が手を加えたものであったことについては、前掲注130『顧頡剛日記』三（一九三四年二月二日）参照。

(173) 禹貢学会が組織され、会誌である『禹貢半月刊』を刊行した動機について、当時、顧頡剛は私信の中で「中国人に中国を認識させよう」と望むためである（前掲注130『顧頡剛日記』三（一九三五年八月七日））と述べており、国民の知識の啓蒙という点があったことは疑いない。しかしその背後には、この「発刊詞」の内容に見取れるように、対外的緊張関係を反映した強い救国意識があったのである。

(174) 前掲注130『顧頡剛日記』三（一九三六年一月五日・十一日、二月十三日、六月二三日）参照。

(175) 無記名『禹貢』学会研究辺疆計画書』、『史学史研究』一、北京師範大学出版社、一九八一年。本史料は、当該誌の顧頡剛追悼記念号の編集に際して収録されたものである。それが馮家昇（伯平）の草稿をもとに顧頡剛が書き直し、手を加えて完成させたものであることについては、前掲注130『顧頡剛日記』三（一九三五年十二月三十日・三十一日、一九三六年一月一日・二日・四日・五日・六日）参照。

(176) この問題については、拙稿「近代中国と文物事業―広州とその周辺を例として」、『論集 中国古代の文字と文化』汲古書院、一九九九年、陳以愛『中国現代学術研究機構の興起』国立政治大学歴史学系、一九九九年、および拙稿「近代中国とアカデミー」、『人文科学

年報』三二、専修大学人文科学研究所、二〇〇二年を参照。以下の議論において、顧頡剛については顧潮編著『顧頡剛年譜』中国社会科学出版社、一九九三年、傅斯年については前掲注161傅集成『傅孟真先生年譜』をそれぞれ参照。

(17) 一九二〇年代の北京学術界の西南辺境民族への関心については、地質学を専攻する地質研究所の丁文江による言語学的関心（一九二〇年における協和医学校講演「丁文江『纂文叢刻自序』、『纂文叢刻』商務印書館、一九三六年所引）と、人類学を専攻する清華大学の李濟による「雲南人文考」への関心（前掲注140無記名「研究院記事」、および李光讓「国学研究院の幾年」参照）が注目されるにとどまる。

(178) このプロジェクトについては、無記名「〔中華民国〕大学院中央研究院工作狀況」、「大学院中央研究院広西科学調査計画概略」、「大学院公報」一一四、大学院公報経理処、一九二八年四月（沈雲龍主編『中華民国史料叢刊 続編』六六一―六五五、六五七、文海出版社、一九七九年影印）、無記名「国立中央研究院籌備経過及組織」、「国立中央研究院自然歴史博物館籌備処十七年度報告」（ともに国立中央研究院文書処編『国立中央研究院総報告（国立中央研究院総報告 第一冊 民国十七年度）国立中央研究院総辦事処、一九二九年所収）を参照。なお、調査団員としては、「李四光（地質学）、李濟（人種学）、徳人顔復礼（ドイツ人）[Yang]（民族学）」が当初予定されていたという（前掲「大学院中央研究院工作狀況」。また、無記名「国立中央研究院第四次院務會議紀錄」（一九二九年一月十三日）、「公函西湖博覧会籌備委員会（一九二九年一月二三日）」（前掲「国立中央研究院総報告」所収）によれば、蒐集資料について、浙江省政府主催で一九二九年に浙江杭州で開催された内国博覧会「西湖博覧会」から出陳希望が中央研究院に寄せられたが、整理中であるとの理由で拒否されたという。「西湖博覧会」の公式記録には（無記名「第五章 館所概況」『西湖博覧会総報告書』一九三一年序〔無記名『中国早期博覧会資料彙編』五、全国図書館文献縮微複製中心、二〇〇三年所収〕、「中山大学物理学系」の「猿山」採集の標本が出品されたことが記録されている。一九二七年から一九二八年にかけて、「中山大学物理学系」教授辛樹幟らが行なった「国立中山大学広西猿山採集隊」の活動については、辛樹幟「辛樹幟―傅斯年（一九二七年十一月六日）」、「国立中山大学語言歴史学研究所週刊」二一六、同研究所、一九二八年二月十四日、辛樹幟「辛樹幟―傅斯年（一九二八年？）」、「辛樹幟―傅斯年（一九二八年）五月三〇日・（六月？）七日」、「国立中山大学語言歴史学研究所週刊・西南民族研究專号」三一三五―三六合刊、同研究所、一九二八年七月四日、辛樹幟「辛樹幟―傅斯年（一九二八年）六月十四日」、「国立中山大学語言歴史学研究所週刊」四一三七、同研究所、一九二八年七月十一日、辛樹幟・石声漢「猿山調査（一九二八年）六月二三日」、「国立中山大学語言歴史学研究所週刊」四一四二、同

研究所、一九二八年八月十五日、無記名「広西瑤山採集隊報告（一九二八年？）」「国立中山大学歴史言語研究所週刊」十一一六、同研究所、一九三〇年一月二十九日、国立中山大学広西瑤山採集隊「請關瑤山為學術研究所意見書（一九二八年七月二三日）」、「国立中山大学歴史言語研究所週刊」十一一七、同研究所、一九三〇年二月五日、および「国立中山大学歴史言語研究所週刊」瑤山調査專号「四一四六・四七合刊、同研究所、一九二八年九月十九日を参照。辛樹幟らによる「国立中山大学広西瑤山採集隊」の活動は、中山大学歴史言語研究所の傅斯年と顧頡剛が共同計画として関与したものであり、また同時に中央研究院が計画した「広西科学調査団」を代表して広東を訪れた中央研究院地質研究所の李四光が、中央研究院の調査の任務を委託したのもであった（前掲無記名「広西瑤山採集隊報告」参照）。「国立中山大学広西瑤山採集隊」の活動は、中央研究院による「広西科学調査団」の構成要素として位置付けられるべきものである。

(179) 中央研究院歴史言語研究所籌備処（傅斯年）「歴史言語研究所工作之旨趣」「国立中央研究院歴史言語研究所集刊」一一一、同研究所、一九二八年（歐陽哲生主編『傅斯年全集』六、湖南教育出版社、二〇〇三年所収）は、従来、傅斯年の執筆とされてきた。顧頡剛の残した日記には、その当時の具体的状況について「今夜為商研究所事（在中大語史研究所外另立大学院之語史研究所於廣州）」（一九二八年二月六日）、「看孟真（傅斯年）所写計畫文」（二月八日）、「与孟真談研究所（中央）事」（四月一日）、「起『歴史言語研究所組織大綱』草」（四月二三日）、「抄中央的研究所組織大綱」（五月二日）、「与孟真討論中央的研究所事」（五月三日）、「作中央的研究所之預算表・集刊目・計畫書等、略畢」（五月四日）、「与孟真……討論中央研究所事」（五月五日）、「作泉州調查預算、改作『造像等芸術調査計畫書』。到校、商中央研究所事、作工作計畫書、……校『歴史言語研究所之工作』等」（五月六日）、「到校、校中央研究所發出公文、草呈文二、公函一」（五月七日）、「与孟真信函、以研究所出版事」（五月九日）など、二人が共同で各種の資料を準備・執筆したことが示されている（前掲注110「顧頡剛日記」二参照）。「歴史言語研究所工作之旨趣」は、傅斯年の「計畫文」、顧頡剛起草の「工作計畫書」「歴史言語研究所之工作」を基礎に、二人の討議によって、五月初旬に確定されたものであり、そこに示された内容には、傅斯年一人だけでなく顧頡剛の意向があわせて反映されていると見るべきであろう。傅斯年・顧頡剛と歴史言語研究所の創設との関係については、杜正勝「無中生有的志業」、顧潮「顧頡剛先生与史語所」、潘光哲「蔡元培与史語所」（ともに前掲注140『新學術之路』所収）、前掲注155 Wan Fan-sen, Fu Ssu-nien「および施愛東「顧頡剛・傅斯年与民俗学」」「顧頡剛先生誕辰一一〇周年論文集」中華書局、二〇〇四年参照。「歴史言語研究所工作之旨趣」の思想については、桑兵「近代學術傳承—從国学到東方学」『歴史研究』

三、中国社会科学院、二〇〇一年（桑兵『晚清民国史的国学研究』上海古籍出版社、二〇〇一年所収）、および前掲注141竹元規人「近现代中国における考古学の命運」を参照。

(180) 無記名「〔中華民国〕大学院接收広州中山大学語言歴史学研究所之経過」、『大学院公報』一一五、大学院公報經理処、一九二八年五月（前掲注178沈雲龍主編『中華民国史料叢刊 続編』）。中央研究院と歴史語言研究所成立の経緯については、王懋勤「歴史語言研究所正式成立の日期」中央研究院歴史語言研究所四十周年紀年特刊「同研究所、一九六八年を、成立後の経緯については、無記名（傅斯年）『国立中央研究院歴史語言研究所十七年度報告』（前掲注178『国立中央研究院総報告』（前掲注179歐陽哲生主編『傅斯年全集』六所収）、中央研究院八十年史編纂委員会編・陳永菴著『追求卓越—中央研究院八十年 一 任重道遠—全院篇』中央研究院、二〇〇八年を参照。

(181) 戴伝賢（李陶）・朱家驊「国立第一中山大学語言歴史学研究所招生簡章（一九二七年八月）」前掲注144『国立第一中山大学語言歴史学研究所週刊』一一一所収。

(182) 前掲注178辛樹幟「辛樹幟—傅斯年（一九二七年十一月六日）」。

(183) 無記名「徵文啓事」『国立中山大学語言歴史学研究所週刊』二一十八、同研究所、一九二八年二月二八日。

(184) 前掲注178『国立中山大学語言歴史学研究所週刊』西南民族研究專号」。

(185) 無記名「本所派員出発『雲南調査』」『国立中山大学語言歴史学研究所週刊』四一三七、同研究所、一九二八年七月十一日、および

無記名「本所大事記」『国立中山大学語言歴史学研究所年報（同週刊六一六二〜六四合刊）』同研究所、一九二九年一月十六日。

(186) 前掲注178『国立中山大学語言歴史学研究所週刊』嶺山調査專号」。

(187) シロゴロフと楊成志による調査対象予定が当初「広西嶺山」であったことについては、無記名「語言歴史学研究所事務委員会第三次會議紀錄（一九二八年六月十一日）」『国立中山大学語言歴史学研究所週刊』三一三四、同研究所、一九二八年六月参照。

(188) 無記名「啓事」『廈門大学国語研究週刊』一九二七年（筆者未見。王文宝『中国民俗学史』巴蜀書社、一九九五年所引）。ここでいう「苗民」とは、今日言うところの畚族である可能性が高い。廈門大学国語研究院については、洪峻峰「廈門大学国語研究院佚文考」『廈門大学国語研究院集刊』一、中華書局、二〇〇八年参照。

(189) 鍾敬文「獯民略考（一九二八年五月十八日）」前掲注178『国立中山大学語言歴史学研究所週刊』嶺山調査專号」所収。

苗族史の近代（四）

- (190) 陳錫英「苗族訪問記（一九二八年五月一日）」前掲注178『国立中山大学語言歴史学研究所週刊・猿山調査専号』所収。
- (191) 前掲注110『顧頡剛日記』二（一九二八年四月五日・四月七日）。
- (192) 傅斯年提議「本所對於語言学工作之範圍及旨趣」前掲注179『国立中央研究院歴史語言研究所集刊』一一一所収。
- (193) 近代欧州のアーリアン学説と印欧語研究については、前掲注10諸文献を参照。
- (194) 前掲注187王文宝『中国民俗学史』、前掲注4王建民『中国民族学史』、趙世瑜『眼光向下的革命』北京師範大学出版社、一九九九年、子安加余子『近代中国における民俗学の系譜』御茶の水書房、二〇〇八年参照。なお、この問題に関連して、民国期の民族学研究の展開について Guljin, Gregory Elyu, *The Saga of Anthropology in China: from Malinowski to Moscow to Mao*, N. Y.: M. E. Sharpe, 1994（胡鴻保ほか訳『中国人類学逸史』社会科学文献出版社、二〇〇〇年）、川野明正『中華民国期の西南民族研究』『アジア民族文化研究』五、アジア民族文化学芸、二〇〇六年で包括的な検討がなされ、前掲注3坂元ひろ子『中国民族主義の神話』、武内房司『西南少数民族』『中国史学の基本問題』四 明清時代史の基本問題』汲古書院、一九九七年、および瀨川昌久『中国社会の人類学』世界思想社、二〇〇四年に、関連する言及がある。
- (195) 前掲注185無記名「本所大事記」。
- (196) 顧頡剛「〔猿山調査専号〕跋語」前掲注178『国立中山大学語言歴史学研究所週刊・猿山調査専号』所収。本「跋語」が、刊行日として記録されるものとは異なり、実際には一九二八年十月二日から十一月十二日にかけて、顧頡剛自身によって執筆されたものであることは、前掲注110『顧頡剛日記』二を参照。
- (197) 前掲179傅斯年「歴史語言研究所工作之旨趣」。
- (198) 前掲注161傅樂成『傅孟真先生年譜』。
- (199) 王愬勤編「中央研究院歴史語言研究所大事年表」前掲注180『中央研究院歴史語言研究所四十周年紀念特刊』所収。
- (200) 顧頡剛「顧頡剛啓事」『国立中山大学語言歴史学研究所週刊』六一七〇、同研究所、一九二九年二月二七日。
- (201) 一九二八年八月に、広州の傅斯年の指示で河南の董作賓に委嘱して始まった中央研究院歴史語言研究所による殷墟調査の展開と、一九二九年前後の傅斯年の動向については、前掲注136拙稿「近代中国と東亜考古学」および「日本東亜考古学之形成与中国近現代学術之興起」を参照。

(202) シロコゴロフについては、中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館藏史語所檔案：元一八六一—「国立中山大学」致函蔡（元培大学）院長（一九二八年四月十七日）、前掲注138無記名「本所大事記」、川久保悌郎ほか「訳者跋文」（シロコゴロフ著・川久保悌郎ほか訳『北方ツングースの社会構成』岩波書店、一九四一年所収）、費孝通「人不知而不温—読後憶師」（史禄国著・高丙中訳『滿族の社会組織』商務印書館、一九九七年所収）、王道還「史語所的体質人類学家」、王汎森「容肇祖与歷史語言研究所」、Kryukov, M., "The Academic Style of the Institute of History and Philology and S. M. Shirokogoroff"（この前掲注140「新學術之路」所収）、および劉小雲「知行両相難—史禄国雲南調査事件探析」『學術探索』四、雲南省社会科学界聯合会、二〇〇七年参照。前記「北方ツングースの社会構成」（Shirokogoroff, S. M., *Social Organization of the Northern Tungus*, Shanghai: Commercial Press, 1933）の自序末尾に、「一九二八年七月広東（広州）にて（Canton, July, 1928）」とあることは、それが楊成志と雲南に旅立つ直前に脱稿されたことを示している。楊成志らの血気にはやる心によって、本書に見られるシロコゴロフの人類学民族的知識と経験が、広州の研究者たちにもっと影響を及ぼすことがないまま、評価されずに埋没したことは、中国學術史における不幸の一例と言えよう。

(203) 前掲注180「国立中央研究院歴史語言研究所十七年度報告」。

(204) 歴史語言研究所の연구원となった李済は、考古学と形質人類学という米国式の人類学の訓練を積んだ研究者であった。そこでシロコゴロフへの期待が生じたと考えられる。中央研究院全体でも、後述する社会科学研究所の民族学組は、ドイツ人の顔復礼（Jaeger）・史図博（H. Stübel）を연구원として採用していた。やがて、まず林惠祥と凌純声がそれぞれフィリピンとフランスから人類学を習得して帰国し、芮逸夫が国内で凌純声らに従って独習し、そして楊成志がフランスへの留学を実現することになる。

(205) 前掲注202劉小雲「知行両相難」。

(206) 楊成志「致願頌剛（一九二八年八月二日）」、『国立中山大学語言歴史学研究所週刊』七—七六、同研究所、一九二九年、楊成志「雲南猓獾調査近訊（致容肇祖（一九二九年三月二六日）」、『民俗（週刊）』五七—五九期合刊、国立中山大学出版部、一九二九年（ともに劉昭瑞編『楊成志文集』中山大学出版社、二〇〇四年所収）、および楊成志「国立中山大学語言歴史学研究所週刊」・雲南民族調査報告』十一—二九—一三二合刊、同研究所、一九三〇年五月二日（楊成志「楊成志人類学民族学文集」民族出版社、二〇〇三年所収）参照。

(207) 中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館藏史語所檔案：元四六（卷宗）「史禄国」、元一八六（卷宗）「史禄国雲南費件」。

(208) 無記名「国立中央研究院籌備経過及組織」「国立中央研究院社会科学研究所十七年度報告」(ともに前掲注178)『国立中央研究院総報告』所収。当初から蔡元培が籌備委員として中央研究院社会科学研究所の「民族科」を担当していたことについては、無記名「中央研究院籌備会及各専門委員成立記事(一九二七年十一月二〇日)」前掲注178『国立中央研究院総報告』所収、および無記名「中央研究院社会科学研究所籌備委員名録」「大学院公報」一一一、大学院公報經理処、一九二八年一月(前掲注178沈雲龍主編『中華民国史料叢刊』続編)所収)を参照。蔡元培(子民)その人、および彼の民族学への関心については、王世儒編撰『蔡元培先生年譜』北京大学出版社、一九九八年、中目威博『北京大学元総長蔡元培—憂国の教育家の生涯』里文出版、一九九八年、前掲注176拙稿「近代中国とアカデミー」、および何聯奎「蔡子民先生對於民族学之貢獻」『民族学研究集刊』三・五、商務印書館、一九四三・一九四六年、前掲注4王建民『中国民族学史』参照。

(209) 顔復礼・商承祖編『广西凌雲峯人調査報告』国立中央研究院社会科学研究所、一九二九年。商承祖については、橋川時雄編『中国文化界人物総覧』中華法令編印館、一九四〇年参照。ただし業績の記述については、弟の商承祚の項目説明との間で、一部混乱が見受けられる。なお、一九二八年夏に中央研究院社会科学研究所民族組のプロジェクトとして行なったこの調査が、中央研究院地質研究所が广西に派遣した調査団に随行したものであったことについては、無記名「国立中央研究院工作報告」『政治総報告』中央政治会議秘書処、一九二九年(『革命文獻』五三)「抗戦前教育与學術」中央文物供应社、一九七一年所収)、および無記名「呈中央政治會議」「国立中央研究院第一次工作報告」(ともに前掲注178)『国立中央研究院総報告』所収)参照。

(210) 黒龍江省での赫哲族の民族学調査と、黒龍江省齊齊哈爾の昂昂溪および熱河省林東・林西・赤峰などでの先史遺跡の考古学調査については、無記名「国立中央研究院社会科学研究所十九年度報告」『国立中央研究院歴史語言研究所十九年度報告』(ともに国立中央研究院文書処編『国立中央研究院十九年度総報告』(国立中央研究院総報告 第三冊 民国十九年度))国立中央研究院總辦事処、一九三一年所収)、凌純声『松花江下游の赫哲族』国立中央研究院歴史語言研究所、一九三四年、梁思永『昂昂溪史前遺址』『国立中央研究院歴史語言研究所集刊』四一一、同研究所、一九三二年、前掲注172水野清一『東亞考古学の発達』および陳星燦『中国史前考古学史研究』を参照。自然科学分野でも、中央研究院が一九二八年の「广西科学調査団」に続き、一九二九年に四川に人員を派遣して動物標本の収集を行ない、一九三〇年にも貴州自然科学調査団を組織して現地に派遣していることについては、無記名「国立中央研究院自然歴史博物館報告」国立中央研究院文書処編『国立中央研究院十八年度総報告』(国立中央研究院総報告 第二冊 民国十八年

度) 国立中央研究院総辦事処、一九三〇年、および無記名「国立中央研究院自然歴史博物館十九年度報告」前掲『国立中央研究院十九年度総報告』所収を参照。

(211) 前掲注187無記名「語言歴史学研究所事務委員会第三次會議紀錄(一九二八年六月十一日)」。

(212) 無記名「国立中央研究院訓政時期工作表」国立中央研究院第一次院務會議紀錄(一九二八年六月九日)(ともに前掲注178『国立中央研究院総報告』所収)。

(213) 前掲注199「中央研究院歴史語言研究所大事年表」。

(214) 以下の楊成志に関する記述については、楊成志「楊成志自述」『世紀学人自述』十月文芸出版社、二〇〇〇年、および楊成志(談)・胡鴻保(執筆)「我与中山大学人類学系」『梁釗韜与人類学』中山大学出版社、一九九一年(ともに前掲注206劉昭瑞編『楊成志文集』所収) 参照。

(215) 烏居龍蔵著・楊成志訳「苗族の名称区別及地理上の分布与神話(一九二八年五月一日)」、および烏居龍蔵著・何建民訳「苗族的土俗一束」(ともに前掲注178『国立中山大学語言歴史学研究所週刊・猿山調査專号』所収)。管見によれば、おそらくこの二篇が、烏居の『苗族調査報告』原文の、中国国内初の翻訳と見られる。

(216) 楊成志「從西南民族說到獨立羅羅(民(国)十八(一九二九)年六月七日在雲南東陸大学演講)」『考古学雜誌』創刊号、黃花放古学院、一九三二年一月(『新亜細亞』四一三、新亜細亞月刊社、一九三二年七月所収)。「考古学雜誌」については、前掲注176拙稿「近代中国と文物事業」参照。

(217) 前掲注206楊成志「致顧頡剛」『雲南狹獮調查近訊』『雲南民族調查報告』参照。なおシロコゴロフの態度が、楊成志に使命感を感じさせることについては、楊成志「単騎調査西南民族述略」『国立中山大学語言歴史学研究所週刊』十一—一八、同研究所、一九三〇年二月十一日(前掲注206楊成志「楊成志人類学民族学文集」所収)、および前掲注214楊成志「我与中山大学人類学系」参照。

(218) 前掲注206楊成志「致顧頡剛」『雲南狹獮調查近訊』『雲南民族調查報告』参照。

(219) 中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館藏史語所檔案・元六四(卷宗)「楊成志」。

(220) 以上の諸点については、陳紅民著・光田剛訳「矛盾の連合体」前掲注20『昭和・アジア主義の実像』所収を参照。このほか「西南」二機関については、呉振漢『国民政府时期的地方派系意識』文史哲出版社、一九九二年、西村成雄『国民政府形成期における政治統

- 合のダイナミズム』、『シリーズ中国領域研究 十一 中国の構造変動と二一世紀に向かう日米中関係』一九九九年、羅敏著・光田剛訳
 『福建事変前後の西南と中央』前掲注20『昭和・アジア主義の実像』所収、陳紅民「胡漢民」、浙江大学学报（人文社会科学版）三七
 一、同大学、二〇〇七年、および陳紅民「函電里の人間関係と政治」三聯書店、二〇〇三年を参照。
- (221) 黄福慶『近代中国高等教育研究』国立中山大学（一九二四〜一九三七年）中央研究院近代史研究所、一九八八年。
- (222) 西南研究会編『西南研究』創刊号、国立中山大学西南研究会、一九三二年二月十日。
- (223) 無記名「国立中山大学西南研究会成立宣言」前掲注22『西南研究』創刊号所収。
- (224) 「西北」論については、吉澤誠一郎「西北建設政策の始動」、『東洋文化研究所紀要』一四八、東京大学東洋文化研究所、二〇〇五年、片岡一忠「近現代中国における『西北』への関心と研究の歴史」、『歴史人類』三四、筑波大学大学院人文社会科学研究所歴史人類学専攻、二〇〇六年、島田美和「日中戦争期榆林における大漢族主義とモンゴル族の自治」、『現代中国』八〇、現代中国学会、二〇〇六年を参照。同時期の「西北」論に西北を中華民族の發祥地と見る主張が散見されるのは、漢族西來說の政治言説への合流として理解できる可能性がある。
- (225) 前掲注22陳紅民「矛盾の連合体」、および陳紅民「函電里の人間関係と政治」参照。
- (226) 以上で論じたように、一九三〇年代広州の西南研究は、きわめて明確な地域特性を持つものである。楊成志に見るように、その系譜は一九二〇年代末広州の西南研究に求められる。しかし一九二〇年代末のそれはあくまでも中央の論理によって構想され、中央アカデミズムの中に位置付けられるべきものであった。近代学術史において、両者の位置付けは区別されなければならない。なお、「西南研究会」の活動とほぼ同じ時期、一九三三年二月から三月にかけて、広州市政府によって開催された博覧会、「広州市展覧会」も、同学会と同じ歴史的背景を持つものとして評価されよう。同「展覧会」については、前掲注176拙稿「近代中国と文物事業」参照。
- (227) 楊成志「西南民族的研究（西南民族自序）」前掲注22『西南研究』創刊号所収。
- (228) 楊成志は広州で「西南研究会」の創設に関与した後、念願であったフランス留学へと向かい、パリで民族学を学ぶ。フランス留学後の一九三三年にパリで執筆されたのが、「中国西南民族中的羅羅族」と題する論文だが、彼はその中で西欧・日本の東洋学者による羅羅族（現彝族）研究を回顧し、苗族と同じ西南辺境民族の一つである羅羅族をめぐって唱えられていた国外起源説に対して厳しい批判を加えている（楊成志「中国西南民族中的羅羅族」『地学雑誌』一、中国地学会、一九三四年〔前掲注206「楊成志文集」所収〕）。

(229) 鳥居龍蔵著・国立編訳館訳『苗族調査報告』商務印書館、一九三六年（一九三五年十二月劉英士訳序）。すなわち前掲注36鳥居龍蔵『苗族調査報告』の中訳本である。訳書の結論部分において、原著の末尾にある「昔日の三苗の国は今や悉く漢民族の有に帰し」云々（本稿第二章第七節所収）という、典型的な苗族先住説に立った記述が翻訳されていないのは、意図的な判断によるものなのか、原著の日誌部分が翻訳されなかったのと同様に、単に有用な記述でないと見なされたためであるのかは不明である。なお、鳥居の苗族調査時の旅日記である前掲注33『人類学上より見たる西南支那』を、凌純声が借り出していることが、中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館藏史語所檔案・雜三五二二「凌純声借書券（一九三七年四月三日）」によって判明する。

(230) 鳥居龍蔵の苗族研究に対する民国学術界の反応については、江応樑『評鳥居龍蔵之苗族調査報告』『現代史学』三一二、国立中山大學史学研究会、一九三七年四月のほか、胡慶鈞『湘西苗族調査報告（書評）』『辺政公論』七一三、辺政公論社、一九四八年、および楊志強「鳥居龍蔵的苗族観」『貴州社会科学』二、貴州社会科学学院、二〇〇八年を参照。

(231) 筆者の江応樑は、一九三六年に中山大學院研究院に入学し、楊成志の薰陶を受けた。江応樑「自伝（一九八七年）」『江応樑民族研究文集』民族出版社、一九九二年参照。

(232) 凌純声・芮逸夫『湘西苗族調査報告』商務印書館、一九四七年。本書の序文は一九四〇年四月に雲南昆明郊外の龍泉鎮に疎開中の同研究所で執筆されている。本書は、その年のうちに印刷にまわされ、翌一九四一年には校正を終えていたが、太平洋戦争の勃発で上海が陥落したため、正式な刊行が戦後の一九四七年にまで遅れたことが、同書の付記に見える。凌純声・芮逸夫が本書を執筆した歴史語言研究所の旧址、龍泉鎮宝台山上の弥陀殿を、筆者は二〇〇九年九月、探し訪ねる機会を得た。現地調査報告は別稿にて行なう予定である。なお鳥居龍蔵は戦後北平の燕京大學在職時に本書に接し、現地でこれに対する書評を発表している（鳥居龍蔵『湘西苗族調査報告』『燕京社会科学』一、燕京大學、一九四八年〔前掲注33『鳥居全集』六所収〕）。そこで鳥居が、かつて自らが立脚した苗族先住説が批判されたことに目を留め、「凌・芮両氏は……はじめに湖南省に居住する苗族を述べ、古代の揚子江附近一帯に居住していた三苗が、何種であるかを最初に論及している。三苗というのは、今日の苗族ではなく、今日の苗とはすなわち古代のいわゆる髦である。また古代のいわゆる蛮とは、まさに現在の傜人あるいは畬人である」と述べて、凌純声・芮逸夫らの主張に対して関心を示していることは、一九四八年当時の彼の民族史観を理解する上で参考となる。

苗族史の近代 (四)

- (232) 馬長寿「中国西南民族分類」、『民族学研究集刊』一、商務印書館、一九三六年、丙逸夫「中華民族的分支及其分布」、『中国民族学会十周年紀念論文集』中国民族学会、一九四四年(丙逸夫「中国民族及其文化論稿」芸文印書館、一九七二年所収)。
- (234) 前掲注210 凌純声「松花江下游的赫哲族」。
- (235) 前掲注202 Shirokogoroff, S. M., *Social Organization of the Northern Tungus* (シロコゴロフ著・川久保悌郎ほか訳「北方ツングースの社会構成」) 参照。その本文中の記述に見るように、シロコゴロフの当時の関心の一つは、ツングース(原ツングース)の南方性をめぐる仮説について検証することであった。シロコゴロフは、広州滞在時に駐屯兵員の形質人類学的データ収集を進め、楊成志との摩擦を生んだ昆明滞在時にも現地の兵員のデータ収集を進めており、また彼の中央研究院歴史語言研究所での未完成の業績の中にも「中国南方人之養育」「中国南方人類学之一」が見える(前掲注180無記名(傅斯年)「国立中央研究院歴史語言研究所十七年度報告」、および無記名(傅斯年)「国立中央研究院歴史語言研究所十八年度報告」前掲注210「国立中央研究院十八年度総報告」)ともに前掲注179 歐陽哲生主編『傅斯年全集』六所収)。彼が広州に赴任した動機は、それまでのツングース系民族の成果をもとにした、ツングース(原ツングース)の南方性という問題を解明することだったのである。そこに中国西南民族学の創始という傅斯年・楊成志らとの思惑の違いが生じたと理解される。シロコゴロフがこの当時、形質人類学に深い関心を持っていたことについては、前掲注202 費孝通「人不知而不温―読後憶師」を参照。
- (236) 鳥居龍蔵の民族史論の特徴については、拙稿「鳥居龍蔵と東アジア」、『北方を旅する』北海道大学出版会、二〇一〇年を参照。
- (237) 前掲注233 諸文献を参照。
- (238) 林惠祥『中国民族史』商務印書館、一九三六年。
- (239) 中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館藏傅斯年档案・二一四七「傅斯年先生致顧頡剛先生函稿(一九三九年)二月一日」(傅樂成「傅孟真先生的民族思想」(前掲注16「傅孟真先生年譜」所収)に部分的に掲載(字句の一部異同あり)。本史料は、当時、ともに雲南昆明に疎開中であつた顧頡剛に宛てた私信の控である。月日のみの記述しかないが、前掲注110「顧頡剛日記」四(一九三九年二月七日)には、この私信を受け取つた顧頡剛自らの所感が記録されており、一九三九年二月のものであることが判明する。この時の二人のやり取りをめぐる諸問題については、前掲注157 拙稿「歴史学者と国土意識」、および本稿続篇第九章での議論を参照。
- (240) 凌純声と共著者であつた丙逸夫が、後に今日の苗族をいしえの「三苗」に結びつける立場へと転向していることは、謝世忠氏が

指摘する重要な論点である(謝世忠「芮氏民族史的性質及其方法理論建構法則—兼論中国地区族群的歴史過程研究」、『人類学研究—慶祝芮逸夫教授九秩華誕文集』南天書局、一九九〇年(謝世忠「国族論述—中国与北東南亞的場域」台湾大学出版中心、二〇〇四年所収)。本文中では筆者が述べた当時の彼らを取り巻く状況と関連付けて説明されるべき点であろう。

(241) 耿文田編『国民大会参考資料』中華書局、一九三六年。中国近代ナショナリズムの展開における「国族」論の歴史的位置付けについては、村田雄二郎「二〇世紀システムとしての中国ナショナリズム」、『現代中国の構造変動』三、東京大学出版会、二〇〇〇年参照。

(242) この問題については、前掲注20謝世忠「芮氏民族史的性質及其方法理論建構法則」、王明珂『川西民俗調査記録一九二九』導読『川西民俗調査記録一九二九』中央研究院歴史語言研究所、二〇〇四年、王明珂「尋訪凌純声・芮逸夫兩先生の足跡」、『古今論衡』十八、中央研究院歴史語言研究所、二〇〇八年、および本稿統篇第九章での議論を参照。

(243) 中国第二歴史檔案館蔵『中央研究院檔案』三九三—二八〇「致蔡元培(院長)函」(筆者未見。王建民「中国民族学各項工作的初步開展」前掲注4『中国民族学史』所引)。

(244) 民族学者によるタイ系民族史論は、顔復礼・商承祖による広西の「猿」調査報告(前掲注20『広西凌雲猿人調査報告』)に際しての「泰族」(タイ系諸族)同源論が、比較的早い例として注目される。これに続くものとして、羅香林・徐松石らの論著(羅香林「古代越族考 上篇」、『国立中山大学文史学研究所月刊』一一二、同研究所、一九三三年、および徐松石『粵江流域人民史』中華書局、一九三九年)が刊行されている。タイ系諸族の認知の過程は、歴史上の「百越」に対する評価の過程とも重なる。近代中国における「百越」史論をめぐる諸問題については、前掲注20拙稿「歴史学者と南支那」、および拙稿「嶺南史における秦と南越」、『東洋学報』八四—一四、東洋文庫、二〇〇三年参照。